

396

64



始

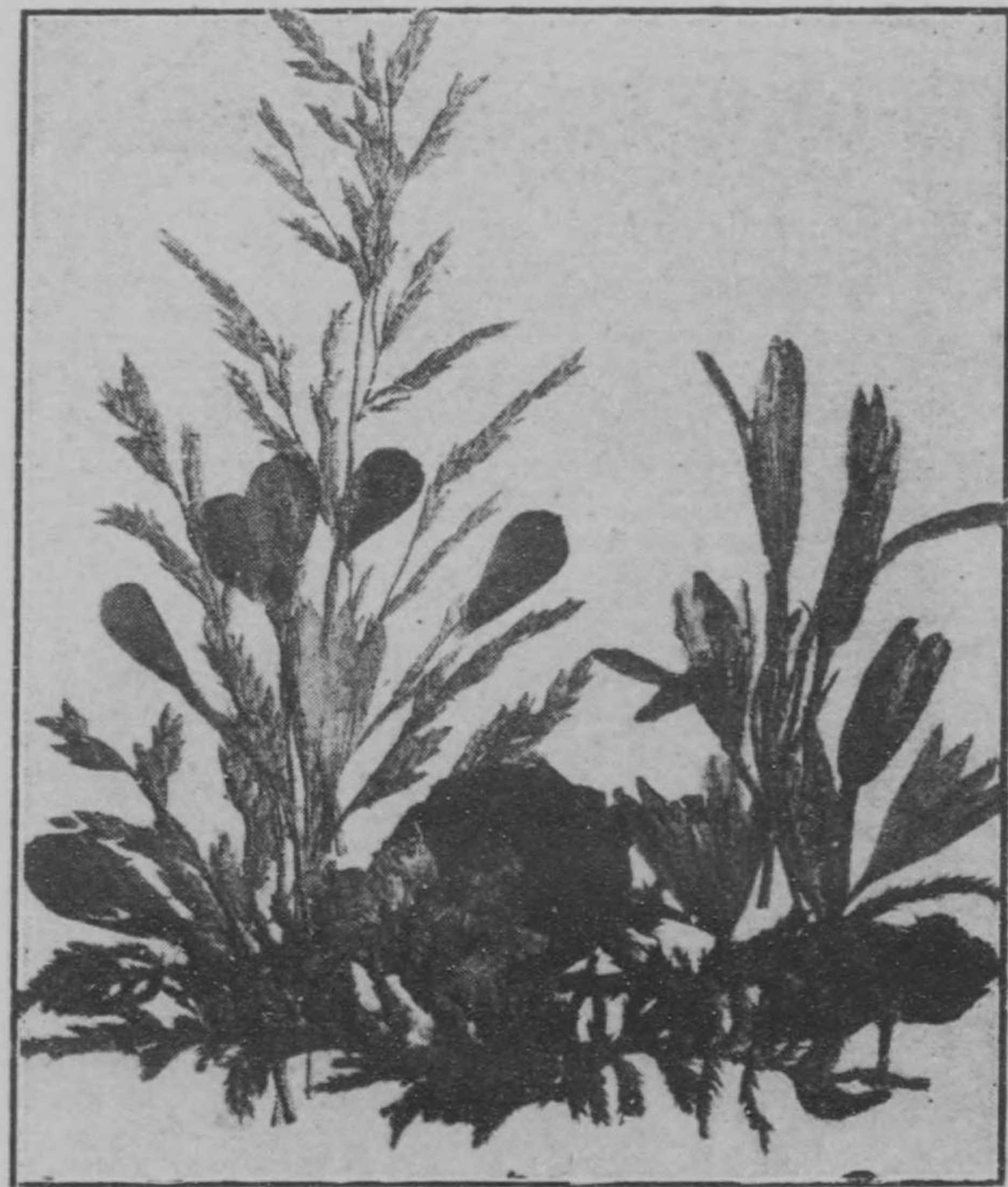


396-64

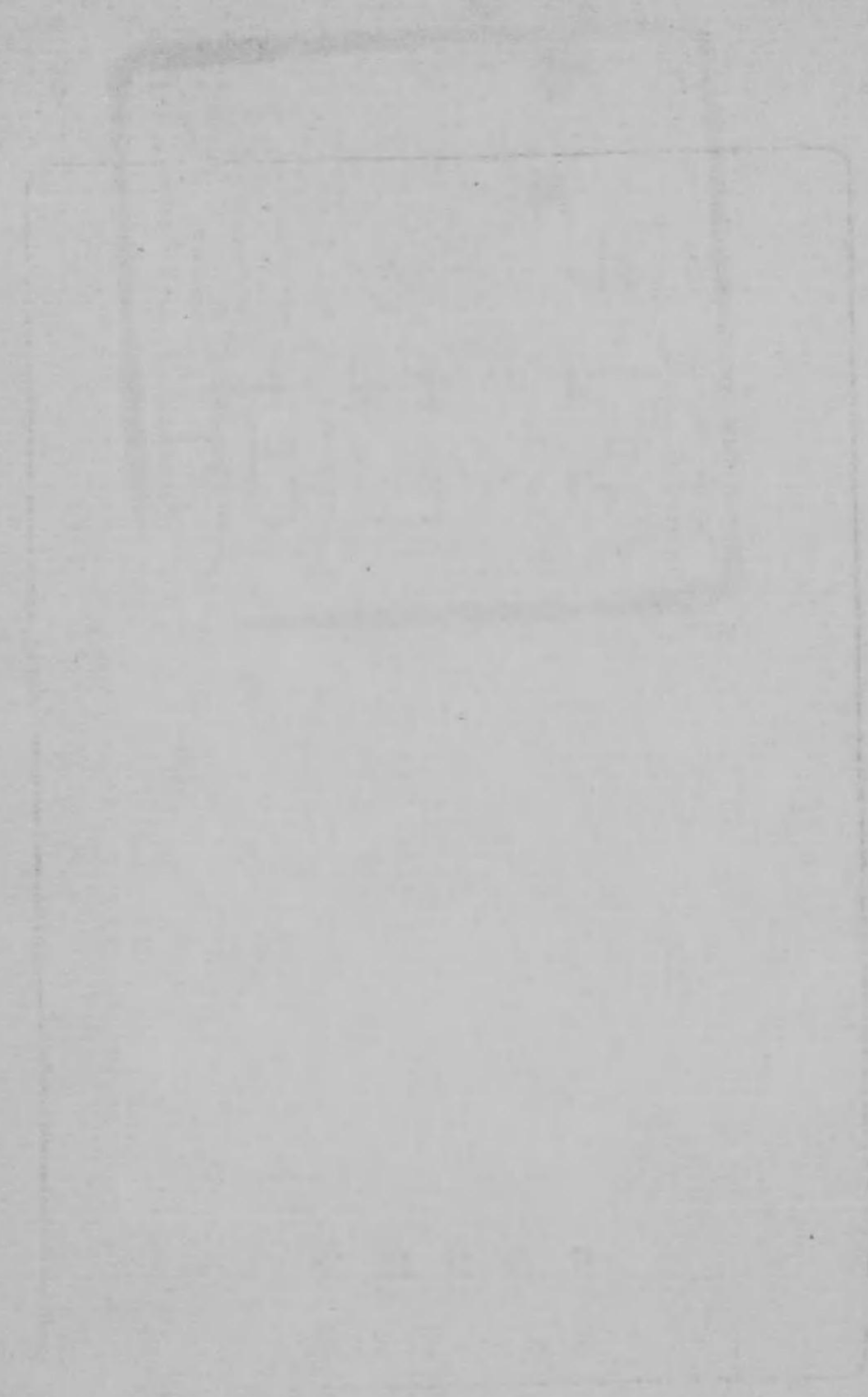


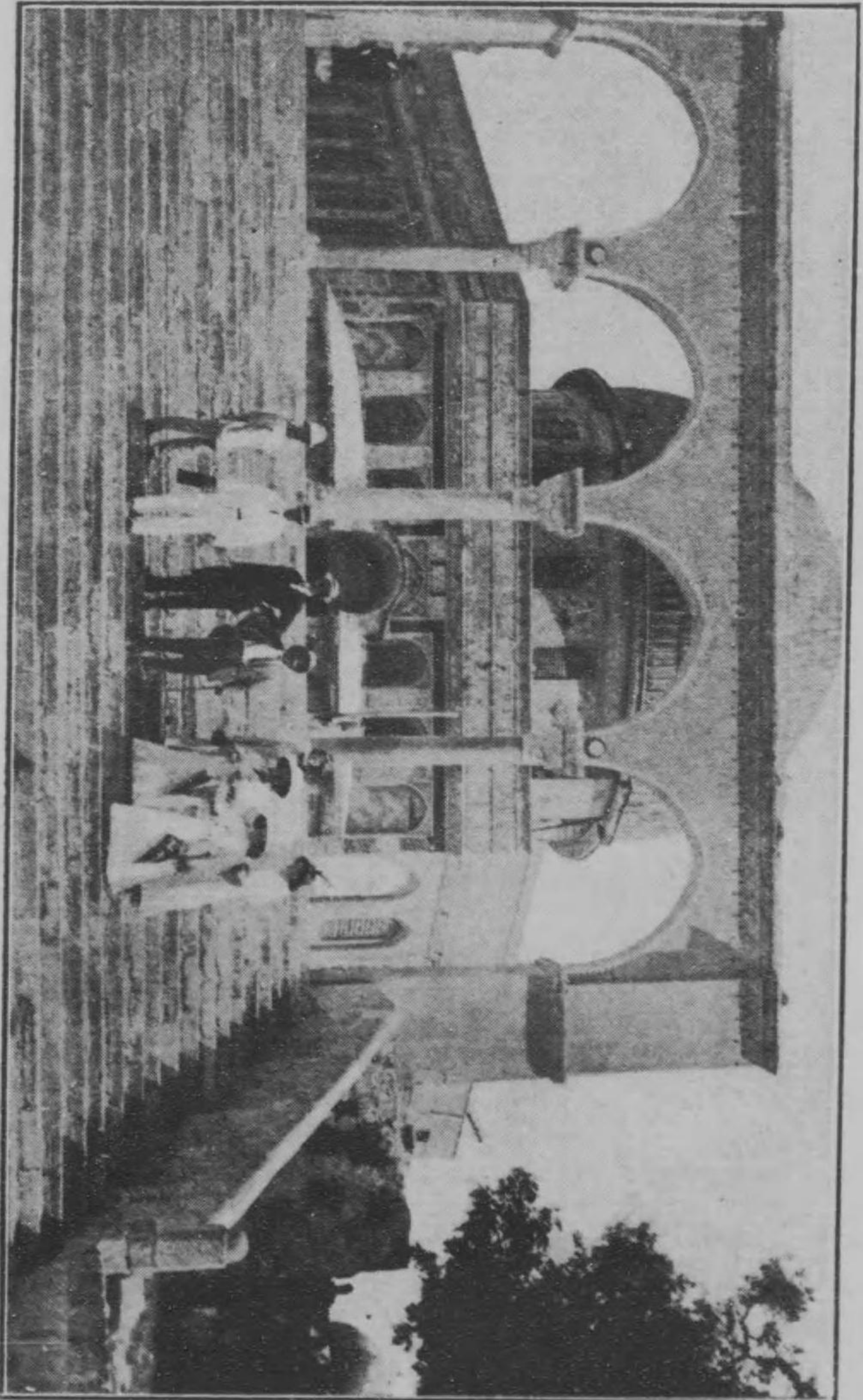
警醒社書店





花草の地聖





(著者左端)にて跡の殿神ムレサルエ

パレスチナ印象記

加藤直士著

はしがき

大正三年（一九一四年）七月四日余はポート・サイドより露
國船に乗り北の方ジャツファに向ひ聖地巡禮の途に上れり。
余生れて幸ひに天地の神を信じ人類の救主耶穌基督の教を
奉ず。生涯のうち一たび主の降りたまへる猶太の地を踏み、
親しく其御足の跡を辿らんとは余が宿年の希望なりき。今次
渡歐の途を印度洋に取りしも、事情にして許す限りは此宿望

を果さんが爲めなりき。日本を發するに臨み、我師友諸氏も亦頻りに此舉を勸奨せらる。某先輩曰く、同信の渡歐者多くは歸途に此行を讓るも、其時になれば大抵は歸朝を急ぐと、囊底空乏を告ぐるとによりて其志を果さずして已む。余の如きも今に之を悔ひ居る一人なり。如かず思ひ切つて往途に之を斷行せんにはと。

然るに或人々余に告て曰く、今のパレスチナは昔のパレスチナにあらず、舊約の名所も基督の古跡も多くは怪しげなる傳説の傳へて今日に至れるもの、何等正確の根據あるにあらず、寧ろ其荒唐不稽なる物語によりて我等が敬虔の念を滅せんのみ。加ふるに土耳其の虐政、回教徒の横暴、舊教徒の迷信は到る處に聖地の神聖を瀆して、汚穢と蠻風と俗悪の人氣とは甚しく我等の感興を殺ぎ、人をして却て美はしき幻想の消失し去るを嘆せしむ。目に見ゆる國土に靈なる神の子の跡を慕ふは愚かならずやと。

余は之に答へて曰く、請ふ我が爲めに憂ふるなかれ。余は行きて傳説の眞否を探らんとするにあらず。此處の名所、かしこの古跡に隨喜の涙をこぼさんとするにあらず。只だ余は

往きて昔ながらの天地自然に接せんと欲するなり。舊約の歴史は上下數千載、主の世を去り給ひしより茲に千九百年、星移り物變りて復昔日の觀なきは余と雖も之を知る。然も山川は依然として猶存せずや。ヨルダンの川はかしこに在り。ガラリヤの湖はかしこに在り。エルサレムの都城はかしこに在り。あゝ余をして主の仰ぎし大空の下に靜かに瞑想するの機會を有せしめよ。然り主の佇みし同じ山野の間に短き祈りの一つをだに捧しめよ。幸ひにして余の足主の踏給ひし土石の一塊にだに觸るゝを得ば余の望みは足れりと。斯く自ら思

ひを定めつゝ余は愈よ聖地巡禮の志を決しぬ。
然も願れば余は今貴重なる時間と金とを費して態々足を聖地に入れんとす。余の見聞する所之を敬愛する故國の同胞諸君に告ぐるの義務あるを思ふ。されど如何せん余には徳富氏の筆なく、小西氏の識なく、又山田氏の學なし。諸氏既に聖地に關する有益なる著述あり。余が匆忙短時日の旅行其上に何の加ふる所かあらん。されば余の以下記述する所は是れ決して精細なる旅行記にもあらず、又誦すべき紀行文にもあらず、只見聞目睹の際余の心に受けたる印象の寸影斷片の

み。讀者請ふ其心して讀過し給はんことを。

露國船に乗る

余はポート・サイドに於て便船を待つこと二日にして露國船フエチャホツフ號に乗り、パレスチナ南方の門戸たるジャツファに向ふ。

露國船内は宛がら人種の共進會とも稱すべく、歐米の紳士淑女あり、赤帽の土耳其人あり、日本人に似たる希臘人あり、黒き覆面せるアラビヤ婦人あり、珠數爪ぐれる天主教の僧尼あり、夕拜に聲を合せて舊約を誦する猶太人の一群あり、人

なかに緞通布き擴げて東南メツカに向つて起伏禮拜する回々教徒あり。己がじゝ欲するまゝの行動の中にも、追に我には爲すべき神聖の義務ありと云ひ顔なるは、西亞の民族の宗教的氣分の如何に濃厚なるかを示して、余をして尊敬の念を禁じ得ざらしめたり。同船の客に米國ハーポートのエピスコパル神學校教授ケルネル博士一行あり。就きてパレスチナの風土民俗等に關し學ぶ所多かりき。

船は夜間東北に向つて航行すること十二三時間、ジャツファ港に着せるは翌五日の早朝六時頃なりき。

ジャツファ港

ジャツファは古のヨツバにして、ソロモン大王が神殿建築の爲めレバノンの香柏を運搬せしと云ふ要港なり。海上より望めば眞白き砂丘に黄褐色の家々の層をなして立ち並べ、こゝかしこ大會堂の尖塔の幾つとなく地平線上に聳ゆる、繁華と見ゆるうちにも何處となく古色を帯べる純東洋風の海岸市、げに聖地の門戸たるに相應しくも見えて心地よし。余が聖地望見の第一の印象は斯くて極めて良好なりき。

使徒ペテロが幻に天より獸を容れし器物の吊りおろさ

れしを見て異邦傳道の志を定めしも此地にて、彼が寄寓せる皮工シモンの家も海岸近くに今猶ほ存すといへど、時間なれば行きて見ず。上陸匆々八時の列車にてエルサレムに上る。

シャロンの野を過ぐ

ジャツファよりエルサレムへの鐵道は佛人の經營にかゝり狭軌にして數輛の列車より成る。今は巡禮季節ならざるも乗客満員なり。汽車は約二時間の間所謂シャロンの野を過ぎて行く。シャロンの野は、春は百合かほり野薔薇笑むなるべき

も、今は麥も過ぎて枯草を作るの時なり。鬼あざみ、野げし、蕎麥の花に似たる野花の盛りも過ぎて僅かに春の名残をといめ、黄き花さく霸王樹の殿めしき生垣に圍まれし耕地には、桑、蜜柑、橄欖の木々緑深く茂れり。土地の波うつ茫漠たる原野には、山羊綿羊の群こゝかしこに點綴し、太古のまゝと思はるゝ牧羊者の服装ことに我目を惹き、羊の鈴音牧者の角笛遠近に聞ゆ。停車場には美事なる西瓜の山なせるあり、農家の娘は藁の皿に紫の桑の實を賣りにきたる。此のあたり地は一體に想ひしよりは肥たり。山の端に隠見する如何なる

小邑にも教會又はモスク（回教堂）の尖塔丹蓋高し。駱駝の通る岨路も次第に細くなりゆけば、地は次第に傾斜の度をまして、やがて汽車は石多く水無き谷の斷崖絶壁の間をぬふてユダヤの山地にかゝり、舊約の士師記、列王記などの舊跡らしき山々邑々を過ぎて、正午頃何時しか余はエルサレム城外の停車場に自らの立てるを見出しぬ。

エルサレム城下の感

嗚呼神の都エルサレムよ、山の上に建られし城シオンの家よ。想へば爾の都城は屢々攻圍の軍に破壊せられ、げに一つ

の石も石の上に墮ちずしては残らざりしも、尙ほ幾千載の後
爾は依然として茲に屹立す。偉大なるかな爾の歴史、壯嚴な
るかな爾の記録、爾は幾たびか地に倒れて復幾たびか武者振
ひして起ちぬ。人類の歴史の最も偉大なる活劇は爾の城壁内
に演せられたり。されば人類は爾の榮光を維持すべく幾たび
も爾を再建して倦むとなかりき。『時』の刀もて有らゆる過
去の出來事を刻込まれし爾の石垣よ。語れ、爾は今爾の下に
東邦の一孤客が胸に一片の憧れを抱きて波路はるかに來りて
こゝに佇みつゝあるを知れりや、否や。言ふなかれエルサレ

ムの偉大は凡てたゞ過去に在り。否々、世界に宗教の亡び
ざる限り、神の靈に導かれて遠く神人の跡を慕ひきたる幾千
幾萬の巡禮者の絶ざる限り、爾の榮光は長へに世界の國々
と其榮華の上に輝くなるべし。見よこゝにも人の子の一人が
黙して爾の下に立てるを。

ベテレヘム行

基督降誕の地ベテレヘムはエルサレムの西南七哩の丘上に
在り。此附近に於る重要な都邑の一にして古來ダビデの邑
と稱せらる。人口約一萬其殆ど全部は基督信者なりと云ふは

快き事なり。道はヨツバ街道を行くこと僅かにして左方に
分れ、平路坦々として車馬絡驛たり。路傍に『博士の井』な
るものあり、東方の博士が猶太人の王とて生れし君を尋ねて
エルサレムより此處まで來りし時、星再び現はれてベテレヘ
ムの方を指し示せりとかや。げに此邊より幾つかの谷と野と
を隔て、遙かにベテレヘムの白く丘上に立てるを望みつべ
し。此の谷此の野は所謂羊牧者が天使の告げを蒙りし處にて
『近傍に羊を牧ふものありけるが野に居りて夜間その群を守
りたりしに』云々どあるは即ち之なり。今尙好個の牧野にし

て橄欖の樹の點々する間に灰色に見ゆるは羊の群にして黒色
に見ゆるは山羊の群なり。『天上には榮光神にあれ、地に
は平安人には恩澤あれ』て祝福の音は今尙此邊りに群を
守る平和なる羊牧者の夢に去來するや否や。やゝ行きてラケ
ルの墓あり。新しき塚なれど、或は古きものゝ位地を示すも
の歟。

やがて我等はベテレヘムの町に着きぬ。高き石造の家は幅
狭き街の兩側に聳えて、見目美はしき處女等の屋根の上より
覗きつゝある、誰かの油繪に見たらん如き圖取りなり。馬車

を町端れに降り、徒歩して商業繁昌を以て名高き市場に出づ。
此處は年々クリスマスの際には數萬の巡禮者を以て埋もれ、
非常の盛況を呈すといふ。

此廣場の一隅に外見教會らしくも見えねど宏大なる一構
への堂宇あり。是なん『聖誕會堂』Church of Nativity とてヨ
セフ、マリヤが一夜の宿りに神子の降誕ましませしいとも神
聖なる舊跡にてぞある。寺院の入口は元廣大なりしが、回教
徒の侵入を恐れて十字軍が改造せしと云ふ極めて狭き門戸を
潜りて堂内に入れば、中は極めて宏莊なる建築にて、四十餘

本の大理石の支柱はエルサレムなるピラトの宮殿より取り來
りしものと傳ふ。四壁のモザイクは古くして模様見分ねど尙
處々に金色の燦然たるものを見るべし。此寺院はコンスタン
チン大帝の母ヘレナ女王の建立にかゝり、最も古き會堂の一
なり。此拜殿の奥に本堂あり、希臘正教會の祭壇なり。其左
方の小堂はアルメニアン教會の祭壇にて更に其後方の一割は
天主教の祭壇なり。斯く一個の教會堂も三派の分立により
て、毎日時間を定めて各自の禮拜を行ふ習ひなり。時に三派
の間に烈しき争鬭起りしこともありて、今尙は土耳其政府の

番兵が堂内に立番せるは一奇と云ふべし。斯く一教會内に於ける宗派分立の姿は獨り此の聖誕會堂にのみ限られず、エルサレムに於ける由緒ある古刹は概ね皆同様の組織の下に平和を維持しつゝあり。熱信もこゝに至れば其弊に堪えずと云ふべきも、又一方より見れば是れほどの熱信ありてこそ、聖地の神聖も尊嚴も維持せらるゝなれ。

本堂の横より蠟燭を手にして眞暗き洞穴に下り行けば、こゝは即ちヨセフ、マリヤの宿りし厩の一部にして、錦繡の綴帳垂れる敷石の一部に金光の星もて劃せるは即ち主の生れま

し、地點なりとぞ。其傍更に一段低き洞穴内に其の初見を置きしと云ふ石の馬槽あり、巡禮者の接吻により四邊も圓く滑かなり。何れも後代の假定に基くものならんが、十數世紀間の人類の尊崇の跡を留めて奥床しくも神々しき限りなり。余も亦此のあたり實に神の子の呱呱の聲をあげ給ひし處かと思へば徘徊去るに忍びざりしもの幾その時ぞ。同じ洞窟内には聖ゼロームが四十年間蟄居して、専心聖書の翻譯に従事せしと云ふ個處あり。聖徒の生活の今更に慕はしく、我も其代に生れしならばなご甲斐なき事まで思ひめぐらしぬ。

やがて堂を出で、歸途につき、夕陽エルサレムの城壁を紅に染むる頃、馬車をダビデ臺下の我が旅館に下る。

此夜月明かにして星稀に涼風膚に徹す。友に告げず獨り旅館をぬけ出で、城外に散歩す。エルサレムの夜は極めて寂寥たり。行人稀にして屋影地に黒し。北の方ダマスコ門外に至り西に折れて橄欖山の方向に進む。美はしきかなエルサレムの月夜、とある橄欖畑の中に入り樹下に踞して冥想黙禱す。あゝ此のエルサレム最初の一夜、此日此時の靈感如何でか筆紙の傳へ得る所ならん。余は此の神の都に來りて何故に初め

より全然沈黙の人たるべく決せざりしやを恨む。げにエルサレムは黙して來り、黙して見、而して黙して去るべき處なり。

神殿の跡

七月六日高等案内者アブーシユ氏の先導にて我等一行はエルサレム興味の一中心たる古の神殿の跡即ち『テンプル、コート』と稱する處を訪ふ。先づ雜鬧、喧囂、汚穢の極度とも云ふべき土着回教徒、猶太人、基督信者の陋巷隘路を通過し、豫て備ひ置ける土耳其番兵に迎へられて、共に薄暗き穹門を爪先登りにのぼりつむれば、茲は則ち一望廣濶にして

氣もさへくするモレア丘上の神殿地なり。此地はソロモン大王以來長くエルサレム民族の禮拜所たりしが、今は回教徒の占領する所となり、土耳其政府の監轄の下にあり。『モスク、オブ、ナーマル』と稱する宏壯なる回教堂其の中心に屹立す。此神殿地は舊エルサレム全市の約三分の一を占め、而も都城の立る四丘中の最高點に位す、面積約四萬坪、以て往時の盛觀を想ふべし。

外廓は古への所謂『異邦人の庭』と稱せる所にして、『婦人の庭』は數個の石段を上れる所に在り。更に數十段の石階

を上りて神殿の建てる中央の地面を『イスラエルの庭』と稱す。主イエス殿にて民を教へ、パリサイ人と論じ、又繩の鞭もて奸商どもを追ひ出し給へるは、即ち皆此邊に於ける出來事なりしなり。古の神殿の至聖所と思はるゝ所には、今や數株の老檜立るのみ。

オーマル大回教堂

大回教堂は此の至聖所の位地を少し離れて前面に在り。空に聳ゆる青銅の大圓蓋上には金色の半月を冠し、周圍幾十の窓は極美なる色硝子を以て彩どられ、外壁の一部は古色尙

ほ鮮かなる陶瓦を以てモザイク式に疊まれたり。脱靴の代りに不格好なる皮製のカバーをはかせられ、幾人かの番吏の立ち並べる中を正面の大扉より中に入れば、内部の壯觀は更に一層人目を眩ますに足る。四壁は金銀寶石の象眼モザイクもて鏤められ、幾十基の斑色大理石柱は林の如く立て、大ドームと其下なる廻廊を支ふ。蓋しアラビヤ式建築の精華を盡したるものと謂ふべし。

此堂はメツカに次ぐ回教徒第二の本山にして、幾多のマホメットの古蹟と稱する者も此中に在り。同じく猶太教より派

生せる回々教が其一本山をエルサレムの神殿地に有するは回教徒に取りては快心の事ならんも、世界の基督教徒に取りては堪えがたき苦痛なりと云ふべし。さればにや中世紀に彼の十字軍あり、當時の基督教國擧つて之が回復に熱狂せしも、オスマン帝國の武威に敵するを得ずして以て今日に至れり。近世に至り世界の基督教會は各派競ふて聖地傳道の擧を企て、兵馬に依らず福音の力によつて土民の教化に努めつゝあり。猶太人も亦其莫大の資金を擁して着々故國に歸農しつゝあるを見る。エルサレムの城外に聳ゆる幾多の教會、學校、

孤兒院、病院、修道院乃至猶太人の耕作地は之を現代的十字軍の勝利と稱するを得べくも、獨り政治上の主人公は依然として土耳其帝國たるは、今日の場合亦是非もなき次第と云ふべし。將來何時かは世界の基督教國が政教兩つながら聖地の立權者たるの日あらんとは何人の腦裏にも描き出さるゝ希望なるべし。知らず其日果して何れの日にか來る。(歐洲大戦に及

十二月九日を以て聯合軍は聖都エルサレムを占領し講和會議の結果英佛二國の一が委任統治國たるに至るべきは讀者の知るところなり)

自然の大巖石

モスク オブ・オーマルの建築美以外に、余の最も興味を

感じたるは、其本堂の中央に頑然として横はる廣さ數十疊の大巖石なり。是れぞ即ちイスラエルの始祖アブラハムが其子イサクを神に捧げたりと云ふ謂ゆるモレアの山頂なりと稱す。自然の大磐石なれば或は疑ひなきものかとも思はれて坐ろに古を偲ばしむ。岩上にマホメットの跪きて祈れる跡のくぼめるありと云へど今は鐵柵に圍まれて見るを得ず。ただ昔ながらの自然の大岩石は人工を極めたる堂内の建築美と相對照して一種言ひ知れぬ莊嚴の感に打たれしむ。蓋し回々教は世界に於ける最も嚴格なる一神教にして何處の回教堂に

も何等偶像らしきものあるを見ず、此大本山の中心點が自然の岩石そのものなるが如き頗る興味深き事ならずや。之を彼の有らゆる神聖なる古跡の上に像を建て繪を畫き燈籠を吊り錦繡を垂るゝ半偶像教的なる舊教其他に比して、余は其果して孰れか此聖殿地の占領者に相應しきかを疑はざるを得ざるなり。近來回々教の發展實に刮目すべきものあり、亞弗利加及び亞細亞の一部の如きは基督教會の一種の恐慌を惹き起しつゝあるの有様なるは其由來する所決して偶然ならざるものあらん。少くとも主一無敵の熱信に於て現代の基督教徒は一

歩を回教徒に輸するものなしとせず。識者の一考を價する問題にあらずして何ぞや。

ソロモン王の財寶

稍や餘談に亘れども、此岩石に關して聞き得たる一珍事あり。こは近年の出來事にして當時の新聞紙上入釜しき問題なりき。英國の貴族に一好事家あり、如何なる典據によりてか此の岩石の下にソロモン大王の夥しき財寶の筐が埋藏せられ在りとの信念を抱き、之を發掘して空前の名譽を博せんと企て、巧に土耳其政府の大官と結託し、遙か城外の丘側より

人知れず地下を掘りて此地點に達すべき隧道を穿ち、將に其目的を達せんとせしが、使役せる工夫の不平より秘密端なくも洩れて、回々教徒の探知する所となり、忽ち回教國內の大問題となりて、激怒熱狂せる彼等は將に亂を起して隨處に基督教徒の虐殺をも實行せんとする危機に瀕せり。英國公使等の必至の盡力によりて幸に事なきを得たるも、爾來回教徒の警戒非常に嚴重になり、上述岩石の周圍に鐵柵を設けて人の近づくを許さざるに至れるなりと。余は此物語を聞きて獨り思へらく、英國貴族の動機と其取れる手段とは固より非難

すべきものありしとするも、若し此大膽なる企てにして成功し、果してソロモン王の遺物を發見するを得たらんには、世界の考古學上に非常の貢獻をなし得たるならん。但し歴史家をして云はしむれば、ソロモンの財寶云々の如きは畢竟夢を捕ふるが如きものなりしやも知るべからず、夢物語に力瘤を入るゝも亦愚なるかなど。

アケサ回教堂の地下室

モスク・オブ・オーマルを出で、正面の大階段を下り、數株のサイプレス樹の間に湧き出づる大井戸より、豚の皮囊に

水を運搬する猶太特有の光景を眺めつゝ、數十歩にして此地
第二の回教堂なる『モスク・オブ・アクサ』に入る。此堂は
ビザンチン時代に皇帝デユスチニアンが『處女マリヤの教
會』として建立せしものなるも、後世回教徒の手に移りて其
會堂に變せられしもの、壁間の美はしき基督教史のモザイク
は、回教徒によりて無残に塗抹せられたる跡歴然たり。建築
の美も大も共にオーマル會堂に及ばざるも、此處に面白きは
其廣濶なる地下室なり。地下數十本の大石柱は上部の地盤を
支へて室内優に三千人を容るべし。ヘロデ王の廐なりしと稱

するも眞偽明かならず、只だ十字軍時代に兵馬の宿舍に用ひ
られし跡あり、史家の研究に價すべき處なり。

城壁よりケドロンを望む

我等は薄暗き數十の石段を上りて再び地上に出で東に面せ
るエルサレムの城壁に攀てこゝよりケドロンの谷を瞰下す。
ケドロンは此聖殿地と橄欖山との中間に横たはる荒寥たる谿
谷にして、その昔主イエスがベタニヤ方面より幾たびか徒わ
たり給ひ、最後の凱旋的入城の際には、驢馬の子に乗りて之
を越え、エルサレムの東門たる彼の『美しいの門』に入り給ひ

し所、今は一帯の死の谷、無数の猶太人及び回教徒の墓石を以て埋まる。蓋し此地に葬らるゝ者等は終りの審判の日に甦るごの信仰に出づ。此谷に臨める城壁の一端に恰かも大砲の筒の如く直角に突出する一石柱あり。回教徒の信する所によれば世の終りの審判の日、マホメットは此石柱の上に坐しキリストは橄欖山の一角に坐し、あらゆる人の子は此石柱より彼の山まで架せられたる鐵條の上を渡らせらる。善人は天使に助けられて無事に彼岸に達し、悪人は落ちて死の谷に亡ぶなりと。我等石垣の角にひたと身を寄せつゝ身をかいめ

て千仞の眼下を見れば、罪深き爲か足戦きて眼眩むばかりなりき。

福音書の野の試誘の條りに『悪魔イエスを聖京に携へてゆき殿の頂上に立たせて云ひけるは爾もし神の子ならば己が身を下へ投よ云々』とあるは蓋し此邊を指して云へる者ならん。殿の頂上とあるは神殿の屋根にはあらで城壁の頂上と解するを寧ろ妥當とす。因つて想ふに主イエスも亦幼少の頃より屢々都に上り、或は好奇心にかられて此城壁の一角に上り、身震ひしつゝ千仞の谷を覗き見られし事もありしなら

ん。神を試みる冒険の最大なるものとして斷崖に身を投ずるの一事に想ひ到られしも亦甚だ自然ならずや。更に之に關聯して思ふに、猶太全國は石の國なり、地味饒瘦にして頑石累累たり。爾もし神の子ならば此の石に命じてパンとなせよとはイエスの想像に最も浮び易き一事たり。最後に主をいと高き山に伴ひゆき世界の國々と其榮華とを示せりとは抑も如何なる高山なりしか。ナザレに近き小ヘルモン山か、エリコに近き所謂試誘の山か。余の考證未だ詳かならず。要するに是等は皆主が平素の經驗に基ける心理の争闘なりしや疑ひを

容れず。かゝる事など想ひめぐらしつゝ、余は恐るゝ城壁を下りて歩をアレトリヤの方面に運びぬ。

羅馬政廳の趾

アレトリヤは古の羅馬政廳の所在地にして、方伯ピラトの裁判廷も其一部に存せしなり。神殿地の北隅の一角を占むる巍然たる建築物にして、其城壁に連れる部分今尙ほ土耳其政府の兵營となり居れり。羅馬政府の位置を示す中世紀の高塔と今の城壁外なるピラトの宮殿跡との間には街路に架するに一個の穹廓を以てす。是を『エツケ、ホモ、アーチ』と

稱す。ピラトがキリストを審判して遂に罪あるを見ず、之を人民の前に立たしめて『此人を見よ』と云ひしは、即ち此の處なりと傳ふ。

プレトリア方面は地勢一體に北に向つて高く、此處より神殿地全體を一眸の下にあつむべし。往昔羅馬の方伯が之に駐在して、日夜猶太人の宗教的中樞を監視せるの狀以て想ふべし。

神殿地の觀覽は特に土耳其政廳の許可を得、且つ番兵を備ひ行く等手續きを要す。されば普通の巡禮者は此處に入るも

の少く、廣濶なる一帯の地域行人稀にして雜草生茂り、今を思ひ古を偲ぶに頗る好適なり。此の日半日の遊覽は猶太の歴史と基督の往時に關する多大の感興を余に與へぬ。エルサレム城内第一の見物は、斯くて極めて印象深かりき。

聖 墳 教 會

世界の基督教徒に取りてエルサレムの尊きゆえんは、そこは一神教の根據地たる神殿の跡あると、又そこは人類の救主イエス・キリスト最後の活動を演じ、空前絶後の壯烈なる最期を遂げ、死して葬られ三日目に甦りて昇天し給へりと云ふ驚く

べき記録と傳説の跡を留むればなり。さればカルバリー丘上の十字架の跡、其墳塋の上に建てられしと云ふ『聖墳教會』はエルサレムに於ける有らゆる尊崇と興味の大中心たるは言ふまでもなし。

余等は神殿地を訪へる同じ日の午後、アブーシユ氏の先導にて歩を此古刹の方に運びぬ。例の陋巷隘街に息をつまらせつゝ右折し左曲して漸く稍や廣潤なる廣場に出づ。其一隅人家稠密の間に重苦しき古き建物の雜然層をなして聳え立つものは是即ち『聖墳教會』(Church of Holy Sepulchre)なり。此堂も

亦第四世紀コンスタンチン大帝時代の開基に係り、世界に於ける最も神聖なる教會の一たり。天主教會の本山たる羅馬の聖ペテロ大會堂の宏壯無比なるに對して、世界の基督教會の大本山とも云ふべき此聖墳教會の一見何ぞしかく見劣りのせる。稍興味をそがれし心地しつゝ而も翻つて思へば教會の尊嚴は其建築にあらずして其歴史に在り、其外觀にあらずして其内容に在り。余は今十數世紀間の永きに亘れる世界人類の尊崇の中心點に詣でつゝありと思へば、我心おのづから戦きつゝ一種敬肅の念に打たれて黙して會堂の扉をくゆる。

果せるかな内部の光景は外観のそれに比して遙かに壯嚴崇高なり。余の興味は會堂其物よりも寧ろ此狭き會堂の中に集中せられたる人類宗教心の發現に向つて注がれたり。看よ古今幾億の基督教徒は其主の遺跡を保存し之が尊嚴を發揚すべく、有らゆる手段を講じて尙ほ其の到らざるを歎ずるもの如きを。我等プロテスタント教の信者より見れば、殆ど偶像教の寺院の如く裝飾せられし此堂内の光景に飽足らぬ心地はすれど、其無限の崇敬心を何等か具體的に顯現せずしては満足し得ざる人心一般の傾向に對しては、須らく寛容の態度

を取らざる可らず。天の父は燔祭と犠牲を好み給はずと訓へ給へる主キリストも、自ら活る犠牲として其身を神の聖壇に捧げ給ひしにあらずや。祭壇も可し聖像も可し、あらゆる美術裝飾も可し。只だ缺く可らざるは之に加へて碎けたる悔し心を神の臺前に捧ぐる事なり。あゝ罪の子よ來つて主の聖壇の前に跪け、主の聖血は淋漓として汝の爲めに茲に滴りしなり。

主の墳塋

教會の門扉より十數歩にして美はしき傳膏石あり。終りま

で忠實なる女の御弟子等が主の體を香物と膏もて包みまつりしは此石の上なりと傳ふ。巡禮者の接吻によりて堅き大理石は波うちて凹めり。其左方圓天井の下に聖墳の堂あり、堂内は狭くして僅かに數人を容るゝのみ、胸に十字を切りつゝ、佇める多くの巡禮者は己が順番の來るを待ちて畏るゝ、其中に入る。燈光薄暗くして焼香の匂高く、一僧默然として暗中に立ち順禮者の出入を監視す。謂ゆる主の墳塋其物は堂の尤も奥まれる處にあり。之を掩へる千古の大理石は幾世紀間の敬虔の唇によりて滑かに磨滅したり。

ゴルゴタの祭壇

聖墳の小堂に對して嚴かに會堂の大部分を占むるは希臘教會の祭壇なり。其右方十數段の石階を上り謂ゆるゴルゴタの跡に建てられし祭壇あり。十字架の立ちし岩石の穴は銀の蓋にて掩はれたり。此薄暗き堂内は金、銀、銅、眞鍮、聖像、油繪、燭臺、燈籠もて寸尺の地も餘さず、錦裝の僧侶今や巡禮者の爲に供養を行ひつゝあり。祭壇の下に主が絶命の際地震ひて裂けたりと云ふ天然の岩石ありと云へど、近よりては見ざりき。

世界の中心點

降りて更に奥まりたる一堂の中央には『世界の中心』と稱する所あり地球儀形の象眼もて其位置を示せり。宇宙若し無限大なりとせば何れの地點か其の中心ならざるべき。舊教徒が特に之を誇稱する所以を知らずと雖も、自然科学の開けざる當時に於て、主が臨終の地點を以て世界の中心と信じたる信念に至つては寧ろ尊敬の價値なしとせず。

更に聖墳堂の背面に廻つて天主教の祭壇あり、多くの僧尼方に讀經勤行の最中なりしが、我等は祭壇の後に導かれて十

字軍時代のものらしき、武器其他の遺物などを示さる。尙此堂内にはアルメニアン教會、コプチツク教會などの祭壇もありと云へど之を見ざりき。

堂内の感

以上記する所は凡て皆一聖墳教會の堂内に在り。もし詳かに堂内の由緒ある個處を觀覽せば優に半日を費やすに足るべく、又此教會の位置が果して眞に基督磔刑のゴルゴタなりや否やの問題(外にゴルトン將軍の發見せるゴルゴタ丘あり)は、エルサレム研究の最も興味ある題目たるに相違なきも、

余は曩にも云ひし如く是等は余が聖地旅行の目的にあらざれば、説明者の雄辯には多く耳をかさずして獨り仲間をはづれて、心裡の印象を内觀しつゝ、明暗相半する此堂内を行きつ戻りつすること之を久しふす。俄然として自己に歸れば身は何時しか堂外烈日の中に在り。

夢の如く美はしく幻の如く慕はしき御堂なるかな。この夢この幻願はくは永久に覺めざれ。余は現實の光を以てエルサレムを見るものゝ愚さを憐れむ。學者は批評的態度を以て此地に來るも可なり、余は學者にあらず、智者にあらず、罪

に泣く憧憬の子なり。エルサレムに來りて美はしき幻想の覺むるを嘆ずるものは、トマスの如く主の肋に其指を入るゝとも尙ほ我は疑ふとや言はん。信せよ、赤子の如く疑はずして唯だ信せよ、敬虔の態度はやがて是れ信の極致なり。

死海方面に遊ぶ

此日午餐の後二臺の馬車を驅り、遠く東の方死海方面に向つて出立す。同行者は米國の三教育家と土耳其コNSTANTINOPLEの米國女學校の女教師二名と、朝鮮より歸米する婦人宣教師二名なり。ジョンと稱するアブーシユ會社の案

内者先導す。馬車はエリコ街道を東に走り、橄欖山の麓を過ぎてペテバゲの村を左に望み、やがてベタニヤの村を過ぎりてユダヤの荒野に出づ。土地に波うつ幾多の砂山岩山の間を縫ふて坂又坂を上り下りつ、やがて峠に近き『善きサマリヤ人亭』に達して馬を休む。我等も亭内に入りて少憩す。飲料土産品などを鬻ぐ。亭の主人は荒くれたるアラブの扮装せるも蓬髯の間に好意の微笑あり、亭の名にも相應しく正直者らしきは嬉し。此あたり一帯の荒涼たる砂漠、旅客の憩ふべきは唯だ此一小亭あるのみ。思ふに古よりしかありしなら

ん。『或人エルサレムよりエリコに下る時強盜に遇へり、強盜その衣服を剥取りて之を打擲き瀕死にして去りぬ……或サマリヤの人旅して此處に來り之を見て憫み……旅邸に携往きて介抱せり』云々の主の物語は固より一個の比喻ながら、こゝに旅して如何にも事實ありさうなる事柄なりと思ひぬ。

馬車は疾風の如く下り坂を馳ること半時、やがて車中に聲あり、死海見ゆと云ふ。手をかざして前方を見れば丘陵起伏の間より、靄たれ込めたる一帯の窪地を望む。黒きほごの深碧色の水其の谷の底にどんよりと横はるものは是れ即ち死海な

り。思ひしよりも小さく見ゆるは我等の位置尙ほ高ければならん。げに此海は地中海面より低きこと千三百呎、エルサレム都城より四千呎の下にあり、世界第一の低地と稱するも宜なり。やがて馬車は濛々たる砂塵をあげつゝ道なき砂原を遮二無二はせて死海の濱邊に達す。

死海の長さ約五十哩、幅尤も廣き所にて九哩、ヨルダン川その他無數の小流を呑みつくして、悉く之を蒸發す。海水の鹹味酷烈にして嘗むべからず。水中一の生物なく、游泳甚だ容易なるも、水より出づれば鹽分頭髮より顔に附着して白粉

の如し。友人三名皆衣を脱して泳ぎたれども、余は他に期する所あれば入らず。靜かに海濱の帆立小屋に憩ひてベド井ン人の勧むる鹽分あるカフェイを喫し、眼を放ちて遠く眺むれば東岸一帶のモアブの山々は紫に煙り、南は涯しなき海水遠く夕霞のうちに没す。モーセがカナンを望みしネボの山はかすみで見えねど對岸のあなたに在るなるべし。海のこなた一面の砂原は荒寥として隨處に鹽のぬかるみあり。丘に一木一草なく谷に死せる獸の骨白し、余の好むホルマン・ハントの『贖罪山羊』の背景は、よくも此あたりの光景を描き得た

るものかな。太古贖罪の山羊を此荒野に放ちしにより、今尙ほスケープ・ゴードの山と稱す。

北の方ヨルダンの流域は遠かに綠樹青草の帯をなして遠く平野に蜿蜒し、其形似たりと云ふ死海をもし緑の瓢に譬ふればヨルダンは即ち青き蔓に譬ふべし。碧波洋々として夕照金鱗を漂はすよと見るまに、看よ一團の明月は對岸の山の端にのぼりぬ。黄金色の月の光は紫の山、緑の海、白き丘を照して其美其壯譬ふるに物なし。誰れか此美の湖を死海とは名づけし。死にも氣高き壯美あり、月夜の死海は美と云はん

より寧ろ嚴かなり。

夕陽已に西山に白つけごも熱風さながら熔爐の口より吹き來るものゝ如く、苦熱云ふべからず。友を促して再び馬車にのり、ヨルダンの川筋に向つて進む。

此あたりの海濱に突兀として聳ゆる多くの砂丘あり。鹽分死海の風に送られてさながら雪の如く又鹽の柱の如し。是等がロトの妻の成の果に候とジョンの云へば、ロトに多くの妻ありしやと一友人は揶揄す。然らば天の火に亡びしソドム・ゴモラの跡は何處ぞやと問へば、そはあのあたりに候とて、

東北の方を指さす。

ヨルダン川に浴す

やがて馬車は名も知らぬ灌木の茂みの中を走ること約半時にして、我等はヨルダンの河岸に達す。人家一二あり、銃を肩にせるベド井ン我等を迎ふ。見れば幅二十間にも足らぬほどの小流、濁水ゆるく淀みて流る。日本ならば田圃の泥川とも稱すべき程のものなれども、水少き猶太に在りては是ぞ國內第一の大河なる。此處はキリストがヨハネより洗禮を受け給ひし處なりと傳へられ、今尚ほ多くの巡禮者の沐浴する處

なり。ボート形の船あり、旅客の舟遊に備ふ。舊約に散見するヨルダンの渡場も亦此のあたりなりしなるべし。

友は舟を賃して上流に漕ぎ行き、余はいち早く衣を脱して河中に投ず。泥深くして股に達す、河岸の楊柳の枝にすがりて身を浮べ、漸くにして川の中流に旗なご立てし足場まで遊ぎつく。時に日已に没して冷風水を渡り、満月淡く對岸の林梢にかゝる。全身を水中に沈めて瞑目黙禱す。あゝ此のヨルダン川の第二の洗禮、如何ぞ此瞬間の感慨を語るを得べき。

『イエス、バプテスマを受けて水より上れる時天忽ち之が爲

に開けて神の靈の鳩の如く降りて其上に來るを見る。生れて罪の子たる我れ固より主イエスの靈覺を知るに由なきも、此ヨルダンの第二の洗禮は余の將來の生涯に對し何等かの意義なくして已むべけんや。オー主よ、冀くは余をして終生此日此時の靈感忘れざらしめよ。夕風そよ〜と兩岸の草にささやく頃、我等は馭者に促されて再び車上の人となる。

エリコの月夜

ヨルダンの荒野月夜のドライブは又更に一興なりき。かしこの樹蔭に佇めるは、身に駱駝の毛衣を纏ひ、蝗と野蜜を食

ひて、悔改めの洗禮を叫びし彼の預言者ヨハネにはあらざる乎。其傍に地も黒きほご群がるものは己が罪を告白して彼よりバプテスマを受けしイスラエルの子等にはあらざる乎。近よりて見れば之はヨハネにあらずイスラエルの民にもあらず、淋しき牧羊者の其群を羊の牢に導くなりき。預言者の名残を留むる聖ヨハネ修道院は死海のこなた荒寥の野に白く立てり。其ほとりに月を踏む一二の修道者の影は長く白き砂の上に横はれり。一望悉く是れ寂寥の天地、ヨシユアが石の柱を建てしギルガル（約書亞書四の二〇）の跡は月光を浴び

て丘のかなたにはほの見へ、やがてエリコの燈の光二つ又三つ黒き樹間に見ゆ。新エリコの村端れにつきしは早や夜の九時とも覚えしが、馬に鞭うちて一氣古エリコの城壁の下なるエリシヤの泉に達す。岩間より湧き出づる古の泉は今や其の姿をかえて、飲料と灌漑用に供する一大水源池は清水を漾々と湛えたり。我等は皆水にのぞみて心ゆくばかり半日の渴を醫し、直ちに引返して泉の下流に繁茂する葡萄、桑、ポプラ、椰子、芭蕉などの林の間を、彼のザアカイの攀し路傍の桑の木は此邊にありつるかなと思ひつゝ、九時半村端れな

る佛國旅館に着す。エリコの炎熱は死海のそれに伯仲し、瓶中の水は温くして微温湯の如く、寢床は日中の熱を吸収して宛ら炬燵に似たり。食後婦人は庭國の樹下に語り、男子は郊外の月下に歩み、十一時寢に就く。月白きエリコの一夜、夢に故國の友と語る、盡きぬ別れ、覺めて眼に涙ありき。

エリコ城趾

翌朝四時起床、殘月未だ空にあり、曉風軽く膚に吹く時。我等男子のみ四人ホテルを立出で、馬車を驅つて再び古エリコの城趾を弔ふ。此城ヨシユアの攻め落せし夫れにはあら

す、恐らく其後に築かれし第二の古城なるべし。數年前より
獨逸人の砂丘より發掘せる所にして、僅かに方半哩ばかりの
一小城なり。而も發掘されし城壁、城門、搦手、塹壕、並び
に城内の宿舎陣營など歴々として見るべし。時に月既に落ち
て日未だ昇らず、荒寥たる古城趾、只だ蟋蟀の聲と我等の蹙
音あるのみ。我等は暗中に相呼應しつゝ、城趾の一部を探險し、
古瓦などを拾ひ、降りてエリシヤの泉に口漱ぎ、馬に鞭つて
エルサレムへの歸途に就く。

四十日山

エリコ古城の背後に巍峨として聳ゆる岩山あり。古來主イ
エスが四十日四十夜惡魔に試みられ給ひし處なりと稱す。ヨ
ルダンの洗禮より直に野に退きて惡魔の試みに遇ひ、救世の
大方針を定め給ひしとあるより、程近き此山をしか名けしな
らん歟。稜々たる山骨、峭々たる岩石、其斷崖の一隅に獨り
祈りて在す人の子の姿を想ひ見よ。嚴かなるかな、人生到る
處に此岩山あり、新しき生涯の門出には別けて此山あり、上
よりの恩寵我が上に降るにあらざれば如何でか此世の試煉に
堪えんや。仰げば山麓は未だ朝靄の裡に包まれ、旭光僅かに

山頂の上を照せり。我は黙して感謝の祈りを捧ぐ。

エルサレムへの歸途

エリコ街道の坂を上りユダヤの山地にさしかゝれば、途中には羅馬時代の古城跡あり。大仕懸なる水道の廢墟あり。エリヤが空の鴉に差はれしと云ふ洞崖は、遙か下なるケリテ川（列上十七の三）の谿谷、斷崖絶壁の間に在り。そこに巢くへる如く淋しく建てるは『聖シヨルヂ修道院』なり。此あたり風景賞すべくユダヤの野とも思へざりき。山野には無数の鶉の群をなせるあり。そここの岩角には大なる蜥蜴の小鳥

の如くとまれるあり。道路の凹凸甚だしく馬車に揺らるゝこと三四時間にして又昨日の『善きサマリヤ人亭』に憩ひ、やがてベタニヤの村に達す。

ベタニヤの閑村

名も慕はしきベタニヤの村、車を停めて先づ路傍なる『ラザロの墓』に入る。濕潤甚しき深き洞窟なり。出で、マルタ、マリヤの住みし跡を訪ひ、癩病人シモンの邸宅の廢墟を見る。凡て後世のものなるべきも、此の小邑にラザロと其二

人の姉妹の住しは事實ならん。彼等は土地の豪家なりしが如く、其邸宅の廣かりしも知るべきなり。さればマリヤがナルダの香油を主の玉體に注ぎしも此あたりか、マルタは響應に思ひを亂しマリヤは主の足下に跪きて其御言葉を聞きしも此あたりか、累々たる廢址間へぞ答へず、只だ香ばしき名を知らぬ花の其跡に咲き亂るゝあるのみ。その花の一つ二つを手帳の間に挿みて懐に抱けば、有りし昔のひたすらに偲はれて、何物かひし〜と我胸に迫る者あるを覺ゆ。

ベタニヤは橄欖山の背面に在り、人家僅かに三四十、エル

サレムに近くして而もエルサレムを見る能はず。東の方死海の方面に連る山野を一眸のうちにあつめ、南の方ベテレへム、ヘブロンの丘陵を望み、風景の美蓋しユダヤの村々に冠たり。一日の奮戦若闘を終へ給へる主の、心靜かに一夜の休養を取り給ふには誠に好適の地なりと云ふべし。大いなる活動は常に靜かなる隱家より出づ。家なき我主に枕する所を興へしベタニヤの村に永久の恵みあれ。主の愛し給へる三人の弟子等に永久の譽あれ。ナルダの香りは此花の一片にも尙ほ残るにあらずや。

噫エルサレムよ

馬車は橄欖山の麓を繞りてエルサレム城の東面に出づ。看よケドロンの谷を隔て、エルサレム城の巍然として聳ゆるを。友は馬車を下りて撮影に餘念なく、余は路傍の小高き處にのぼりて、メンデルソーンの『聖保羅オレトリアム』の二節『エルサレム』の聖歌を聲の限りに歌ふ。『噫エルサレムよエルサレムよ豫言者を殺し爾に遣はさるゝものを石にて撃つ者よ、母鶏の雛を其翼の下に集むる如く、我なんぢらの赤子を集めんとせしこと幾次ぞや、然ぞ爾曹は好まざりき』。嚴か

にも尊き御言葉かな。我今主の立ち給ひし此丘の上に立ちて獨り嚴かに此歌をうたふ。調拙しと雖も心に一片の誠あり。聲はふるえて空谷に響き、胸は迫りて眼に涙下る。徘徊去るに忍びざるもの之を久しふし、友に促されて漸く車中に入る。正午エルサレムに歸る。死海方面への此行、往復六十二哩、感慨多く靈味豊かなる旅行にてありき。

驢上の半日

エリコより歸りし日の午後は全く休養し、翌八日の朝我等は數頭の驢馬を列ねて、ヨツバ門外の旅館を出で、ヒンノムの

谷に向つて進む。ヒンノムの谷はエルサレム城の南にあり。一名『焦熱地獄』と稱し、『不淨門』のある所なり。一目荒寥たる石の谷。こゝにイスカリオテのユダが主を賣りし三十銀を代て陶工の手より購へる『血の畑』あり、『アケルダマ』即ち是れなり。古來異邦人の此地に客死する者を葬る處に用ひられ、場内の洞窟に無數の白骨累々として積み重ねられたるを見る。かの羅馬なるカプチンの骸骨寺を想ひ起さしむ。驢背ならでは越えがたき程の石ころ路を上り下りして『ヨアブの井』に出づ。こゝはダビデ王の子アドニヤが自ら王位

に即かんとして兄弟等を招き、宴を開きしと云ふ謂ゆるエンロゲルの跡なり。(列上一ノ九)
やゝ進みて主が生來の醫者を醫し其眼を洗はしめしシロアムの池あり。奥深き洞内に清泉の流るゝ音あり。此水は同じ谷なるゲホムの泉より流れ來るものなりと云ふ。『シロアムの塔倒れて壓殺されし十八人はエルサレムに住める凡ての人々よりも益りて罪ある者と思ふや。われ爾曹に告げん爾曹悔改めずば皆同じく亡ぼさるべし』と主の宣ひし其跡には、粗末なる石造りの塔淋しく立てり。附近の村の若者二三來りて水

浴しつゝあり。水を打つ音遠く洞内にこだまして、聲に千古の響きあり。

ケドロンの谷

やがて城東ケドロンの谷に出づれば、そこには神殿の祭壇に殺されし義人ザカリアの墓あり。イエスの兄弟聖ヤコブの墳あり。又ダビデ王の蕩兒アブサロムが『我にわが名を傳ふべき子なし』と云ひて自ら建てしと云ふ大なる石塔あり。而して此のあたり一面の谷底には無数の回教徒、猶太教徒の墓あり。一目是れ死の谷、墓の國なり。義人の墓、悪人の墓、

王者の墓、豫言者の墓、名もなき人の墓、雑然として茲に死の平等を傳ふ。驢上の我も亦そぞろに死の意義を想ふ。

ゲツセマネの園

あゝ我れゲツセマネの園を想ふこと久し、今や其地に來りて老橄欖樹の蔭に立つ。我靈よ敬虔の眼を開け、而して靜かに深夜園中の樹下に跪き、血の涙もて祈り給ひし主の御姿を想ひ見よ。

園は橄欖山の山腹ケドロンの谷に臨める處に在り。今は天主教の一派フランシスカン宗の保管する所なり。黒衣繩帶の

僧黙して我等を迎ふ。繞らすに石塀を以てし、數百年を経たらん如き橄欖の老樹のあるあたりは、更に鐵柵をもて取り圍まれたり。老樹の間には各種の草花美はしく栽培せられ、柵外には硝子窓の温室さへ設けられたるは聊か不快なる對照なり。

吾等はゲツセマネとし聞けば何となく直に寂寞荒涼の地を聊想すれども、聖書に野と云はず山と云はずして園と云ふ以上は、當時より何人かの私有にかゝる庭園の一部なりしならん。或は主の弟子の一人が其園を主が祈りの用に供しまひら

せしなるやも知るべからず。固より園内の趣きは全く變り果しならんも、餘りに人工的なりとして一笑し去るにも及ばざるべし。余はかく思ふて獨り樹下に佇むこと少時、僧に請ふて橄欖の小枝二三を貰ひ受け、肅然として園を出づ。

主の三人の高弟が意氣地なくも疲れて眠れりと云ふ岩石は園外投石の距離に在り。又行くこと十數歩にしてユダが主を敵手に渡せしと云ふ恐ろしき場所あり。ケドロン谷間より闇を破りて上り来る炬の光、我は爾曹の尋ぬる者なりとの主の一言に瞠若として地に倒れし羅馬の兵卒、ラビ安かれと

云ひて近よりて接吻せるユダの形相、血氣にはやりて劍を抜き祭司の僕を斬れるペテロの雄姿、皆我が想像の眼底に髣髴す。『我父よ若し叶はば此杯を我より離ち給へ、然れど我心のまゝを成さんとするにあらず、聖旨にまかせ給へ』此の古今最高の祈りの御聲が一たび此園の寂寞を破りてより茲に千九百年、主は去り使徒は死せりと雖も、此ゲツセマネの祈りの精神は永久に世界幾億の信徒の心に日々新しく經驗せられつゝあるなり。橄欖の老樹或は枯るゝ時あらん、此園或は影を没する時もあらん。されど永久に廢らざるは主イエスの御

言葉なり。ゲツセマネは惱める人の子の生命の園なり、慰安を求むる者の永遠の花園なり。

同じ橄欖山の山腹程近き處に希臘派のゲツセマネ院あり。聖マグダリン教會と稱す。新しき教會にして金色燦然たる圓蓋空に聳ゆ。之も主の聖跡争ひの一つと思へば入りて見る心地もせず。附近の『聖母マリヤの墓』はいとも廣濶なる洞墳なり。又『御惱みの岩窟』なるものあり、眞否固より定かならざるも、何れも古代より爾か傳へられたるものなりと。傳説は時として史乗以上の價値あり、典據なしとて一概に唾棄

すべからず。

城外のゴルゴタ丘

歸路ケドロンの谿を渡り堅く閉ざれある『美しいの門』一名『金門』を東面の城壁の中央に仰ぎ、ステパノが石にて撃ち殺されし跡を弔ひ、其名をどいむる『ステパノ門』を左に見て『ソロモンの石切場』と稱する處に達すれば、其右方の郊外に獨體形せる一小丘あり。是れなん數十年前にゴルドン將軍によりて主張され、爾來多くの學者によりて其位置を確かめられし眞のゴルゴタ丘なり。丘のあたりに園あり、園の中

に巖を穿てる幾つかの古墳あり。其うちの一つがアリマタヤのヨセフの新しい『園の墓』にて十字架より取りおろしたる主の體を葬りし處なるべしと云ふ。基督磔刑の場所が城内般賑の地にありしとは思はれず、城壁より遠からぬ此邊の郊外なりしと想像するを至當とす。勿論『聖墳教會』のゴルゴタ説を主張する人々は、當時の城壁は北面に於て屈折し居り、ゴルゴタは其外部に在りしと信するものゝ如きも、他の三面に於て方形をなせるエルサレムの城壁が、獨り天然の地勢上外敵の襲撃に對して最も手薄き北方に於てのみ屈曲せりと想

像するの必要もなからん。余は假りに今日の城壁の位置を以て基督當時のそれと等しきものと認め、其外部に位して而も街道に近き此ゴルゴタ丘こそ其位置尤も眞に近きものと思はざるを得ず。況んや丘そのものゝ形状の髑髏そのまゝとも稱すべくして、園の墓さへ其附近に發見せられたるをや。考證の議論は姑く措きて、自然の下に主の聖跡を尋ねんことを熱望する余の感情は、彼の殿堂祭壇の下に埋もれる『聖墳教會』のゴルゴタよりも、蒼々たる大空の下に幾千年の雨露に曝されて尙ほ其形を留むる此の自然のゴルゴタに對して言ひ知れ

ぬ一種の満足を感じざるを得ず。知らずや自然の感情は時として最も公平なる判斷者なるを。

橄欖山上の展望

翌九日は余に取りて尤も多忙なる一日にてありき。余は此一日を以てエルサレムの觀覽を終り、北方旅行の途に上らんとすればなり。早朝馬車を驅つてダマスコ門外より郊外に出で、遠く橄欖山の頂きを極めんとす。途中『列王の墓』なる者を見る。廣くして暗き洞窟の中墳墓の位置を示すもの數十個あり、以て優に古代イスラエル人の墓なるものゝ概念を得る

に足る。茲に尤も興味を感せしは、墓の入口を塞ぐ爲め大石を轉ずるの装置なり。幾分か傾斜をなせる石の溝の上に如何なる大石をも容易に轉ずるを得べし。馬太傳廿七章の記事などを想ひ合せ、獨り點頭かざるを得ざりき。

羅馬帝王タイトスがエルサレム攻撃の際陣取りしと云ふスコバスの高丘を左に望みつゝ、馬車は丘上の平路を東南に向つて疾驅し、やがて此あたりの最高峰たる橄欖山頂に達す。こゝに希臘派建立の『昇天教會』(Church of Ascension)あり。二百七十呎の大高塔其の傍に聳ゆ。余等は幾たびか息を

つぎつゝ、其の螺旋階を昇りて絶頂に近き欄干に倚りて展望す。あゝ是れ何たる壯大のバナラマぞや。余は是まで幾多の高塔に攀たりしも、未だ曾て斯くの如き眼界の廣濶雄大なるを見しことなし。

先づ西の方エルサレムの方面を眺むれば、こゝの教會かしこの回堂、高塔圓蓋あらゆる形状の大建築物は宛がら將棋の駒を並べたるが如く、城内外の名所舊跡一々指呼すべし。眼を南方に轉ずれば、近くはベタニヤの村眼下に在り、遠くはベテレヘム、ヘブロンの名邑波瀾の如く起伏する丘陵の間に

見ゆ。更に轉じて東方を眺むれば、眼界更に廣くしてギリヤテ、アマナイト、モアブの山々遠く死海のあなたに連り、ヨルダンの川、エリコの城、ソドム・ゴモラの趾悉く一眸の中にある。もし夫れ眼を北方に轉ずればエルサレムの背面一帯の高原は遠くサマリアの山々に連りてヨシユアの古戰場たるアイ、ベテル、ギベオン等の邑々地平線上に隱見す。此あたり余が明日を以て通過すべき方面かと思へば、おのづから我胸の躍るを覺ゆ。

エルサレムの地形

此高塔よりの展望は余をしてエルサレムの地勢を手取る如く知らしめたり。或人のよくも言ひし如く、げにエルサレムは一個の固く握れる拳を南方に向けて突き出せる形に似たり、拇指の位置にある東面はケドロン谷、ヨセバテの谷を隔て、橄欖山に對し、小指のふくらぎの位置に當る西面は城壁尤も高きダビテ臺ヨツバ門を控て遠くユダヤの高原を扼し、而して並び握れる四指の位置に當る南面には焦熱地獄の稱あるヒンノムの谷ありて自然の形勝を占む。只だ北の方手頸に連る一面のみは、何等の天險要害あるなく、寧ろ反對に

サマリヤ山脈の高地を其背後に負ふ。故にエルサレムの戦史は常に此方面より敵襲を受けて落城したるを示す。蓋し北方はエルサレムの所謂鬼門とも稱すべきもの歟。されば戦術の上より云へばエルサレム築城には大なる弱點ありと云ふべきも、モレア丘上神殿の位置より云へば猶太國中恐らく之に勝れるものあることなげん。猶太は常に外敵に敗れて今尙ほ異邦人の治下に在り。されど宗教的には優に世界を征服し終れり。第三の試誘（馬太傳に依る）に對する主イエスの勝利は猶太國をして世界精神界の優勝者たらしめ、同時に政治界の

劣敗者たらしめたり。政權掌握に斷念して靈界の王者たるを期し給へる主の識見や遠大なりと謂ふべし。エルサレムの地勢に因みて聊か所思を述ぶ。

橄欖山上の昇天教會の附近には、主が弟子に『主の禱』を教へ給へる場所なりと云ふ『天父教會』(Church of Our Father)あり。天主教の尼寺あり。主が最後に其足を立てられし昇天の岩なるものあり。ペテバゲの村より驢馬の子を曳き來りて主の乗り給へると云ふ踏石あり。又や、隔て、露國教會の宏莊なる巡禮宿舍（ホスピース）と稱し、歐洲各國皆聖都に之

を有す）あれど一々記述するの違なし。

受難の巷路

此日余は同行者の晝休の時間を利用して一人のガイドを伴ひ『ヘゼキアの池』、『ピラトの宮殿』プレトリアなる『答鞭の教會』聖母の生れし『聖アンナ教會』五つの廊ある『ベテシダの池』などを巡覽せしが、取り立て、言ふほどの事もなし。唯だ『ウヰリア・ドロサ』は余に深甚の印象を興へぬ。ピラトの宮殿なる所謂『審判廷』より發して、聖墳教會のゴルゴタに達するまでの屈折せる一路の道筋を『十字架道』

もしくは『受難の巷』(Via Dolorosa)と稱す。是れ敬虔なる巡禮者に取りては最も意義深き處にして、全道悉く鋪石を以て敷詰められ、主が十字架の重みに倒れ給ひしと云ふ十四ヶ所には石垣又は街の壁に第何ステーションと誌したり。ゴルゴタの眞位置如何により今日の『受難の巷』の眞否も定まることながら、とまれ此あたりに惱める我主の重き十字架を負ひつゝ、倒れては又起き起ては又倒れ、漸くにして刑場まで辿りつき給ひしかと思へば、今其上を濶歩しつゝある我足の勿體なくも思はれて、責めては記念の爲めにと路傍の石一つ

を懐にして歸りぬ。

あゝ思へば主の爲めに十字架を擔ひしクレネのシモン今何處にかある。多くの人の子は我が指の一端をも主の荷の爲めに添へまつることをなさず、却て多の罪を重ねて再び三たび我主を十字架につけまつるにはあらざる乎。辱なくも尊きグイア・ドロサよ、我が踏し爾の石の上に冀くは永久に我此の思ひを留よ。

聖ヤコブ教會

九日午後は先づ使徒ヨハネの兄弟ヤコブの馱られし跡なる

アルメニアン派の『聖ヤコブ教會』を訪ふ。今や衆僧勤行の最中なりしが堂内の光景何となく我邦の禪寺を想ひ起さしむ。概してアルメニアン派は希臘羅馬の二派に比すれば遙に原始的なり。余未だ埃及に發達せる彼のコブチック派の寺院を見ざるも、想ふに其純朴の點に於てアルメニアン派に類するものあらん歟。西方亞細亞に來りて余は此等二派の存在を知りて興味を覺ゆること深し。

カヤバの邸

祭司長カヤバの邸趾は稍や小高き處に在り。今はアルメニ

アン教會其の處に立つ。門内に敷詰たる鋪石の庭には同派の大監督等の墓あり。やゝ奥まれる内庭には古きモザイクの鋪石處々に残りてありし昔の壯麗を偲ばしむ。此處がカヤバの邸宅、基督を糺弾し侮辱せし處なりと傳ふ。ペテロが焚火に暖まりつゝ主を知らずと云ひしは何れの邊ぞ。主の一瞥に鶏三たび鳴きて悔しペテロの出てゝ慟哭せしは何れの邊ぞ。弱き罪の子の淺猿しさよ、人事とも覺えず、恥ちつゝ門を出つ。

晚餐の樓房

主が最後の逾越の晚餐を十二の使徒と共にし給へる所謂樓房(Upper Chamber)なるものを見る。横に長き石造の一室にして穹窿形の天井は二三の大理石柱によりて支へられたり。室の正面に一段高き所あり、こゝに晚餐の卓子ありしが今は移されて羅馬のサンペテロ會堂に在りと云ふ。巷の喧騒を離れて物靜かなる此一樓房は、主の訣別の聖訓を垂れ給ふに最も好適の處たりしなるべし。茲に主は永世不朽の聖晚餐式を定め給ひぬ。茲に主は自ら盥に水を汲みて弟子の足を洗ひ給ひぬ。爾曹のうち一人我を賣すものありと聞きて『主よ我な

るか』と争ひて弟子の間へるも此處なり。ユダの出で行きし
後主が弟子と共に歌を詠ひつゝ橄欖山に往けるも此處よりな
り。あゝ思ひ出多き此『大なる樓房』よ。その小暗き室内
の空氣に漂やう幽嚴の感じよ。我心は永く此アツバー・チエ
ンバーの中に住まんことを願ふ。否我心の中に常に此靜かな
る樓房を有せんことを願ふ。

此家は古來大王ダビデの宮殿の跡として傳へらる。樓房
に接する一室内に高さ六尺も有べき大なる墓石あり、形狀彫
刻共に大古。版きあり、回教徒の尊崇する所にして手々こゝ

に盛大なる祭典を營むと云ふ。主の樓房がダビデ王の宮趾
の一部に在りしとは聊か信じがたき感はあれども、若し果し
て眞なりしとせば、こゝに政界の帝王が靈界の王者に其の處
を譲りしものと稱すべく、意義深き奇遇とや謂ふべし。或は
ダビデの裔なりと人も信じ自らも信じ給へる主が、特に此處
を選びて、最後の晚餐を食し給ひしにはあらざる乎。若し然
らば主が當夜今昔の感更に一層切なる者ありしならん。余は
此二名跡の關係につき、聖地學者の考證の結果を聞かんこと
を欲するものなり。

猶太人の慟哭場

是れエルサレムならでは見がたき一名區なり。ソロモン王の築きしエルサレム城壁の一部、神殿地の隣接する所に長さ二三十間にわたる古き石垣あり。こゝに熱心なる猶太人等は朝夕來りて聖都回復の祈願を捧ぐ。祈願とはいへど實は一種の悲愴なる哀歌を唱じて亡國民の憂愁をやるもの。余の訪れしは午後の五時頃なりしが、三四十人の猶太人は老若男女を問はず、或は立ち或は座し、或は頭を石垣に打ちつけつゝ或は敷石の上に膝頭もて跪きつゝ、おのかじゝ聲高らかに亡國

の哀歌を謳へり。其の調其の詞、如何にも哀れに如何にも悲しく、謂ゆる鬼哭恸々とは此の事ならんかと思はるゝばかり。余はそゝろに亡國の民の憐れさに胸打たれ、彼等と共に聖地回復の期の日も早からんことを念じつゝ、やがて歩を轉じて、程近き猶太人のシナゴグに入る。シナゴグは猶太教の會堂にして、そこには年老ひたる一ラビが額に山法師の呪の如き一寸角ほどの黒き經筐を戴けるが、傲然としてタルムードを講じつゝあるを見る。猶太人のシナゴグは會堂と學校とを兼ねたる組織にして、來拜者はそこに來りて父老

又は教法師に就きて聖典の不審を質すを事とす。建築は概して素朴清楚にして、寧ろ新教の會堂に似たり。エルサレム市内に約四十のシナゴグありと云ふ。

因みにエルサレムの人口は約九萬、其の三分の二は猶太人にして、残りの三分の一は基督信徒と回教徒なり。歐米人の數は約千人を數ふべし。位置は北緯三十一度八分と云へば、畧ぼ我が九州の南端と等しかるべし。氣候夏季は酷熱なれども、空氣甚しく乾燥して日中と雖も發汗すること少し。土地海面を抜くこと實に二千四百呎、冬期は寒風凜烈にして野

に氷雪ありと云ふ。雨期は十一月より三月にわたり其外に殆ど降雨あることなし。地味礫確にして收穫少く、野に牧畜の雜草あり、山に橄欖の疎林あるのみ。

余は此日を以て四日間のエルサレム觀光を終ふ。筆を擱くに當りて瞑目回顧すれば印象尙ほ鮮かにして、心中言ひがたきの感謝あり。

北方旅行の途に上る

七月十日拂曉、殘月淡くヨツバ門外ダビデの臺にかゝる頃、余は懐かしきエルサレムの都に永久の別を告げ、遠く北

の方サマリヤを経てガリラヤに赴かんとす。

此行豫め適當なる同行者のあらんことを期したりしも、巡禮季節をはづれたる今日此頃、市内のホテル其他の各方面に普く問ひ合はするも一人の同志を得ず。爲に已むを得ず余一人にて馬車及び案内者を僱はざるべからず。若し多少の時日あらばエルサレムにて同行者の出来るを待合はすも可、徒歩又は馬上にて悠々山野を跋渉するも可、以て大に経費を節減するを得べけんも、如何せん余がポートサイド乗船の期日僅か一週の後に迫り、其間を以て一通り北方パレスチナの名

勝を探り、地中海岸ハイファ港よりの定期船に乗りて聖地に別を告げざる可らず。従つて馬車旅行に身分不相應なる多額の旅費を要し、貧囊の主たる余をして非常なる苦痛を感せしめたり。去りて北方パレスチナを見ざれば、以て聖地を見たりと云ふを得ず。ナザレの邑ガリラヤの湖を訪はずして空しく歸るは終生の遺憾ならん。況や北方は山川の美、自然の優、全パレスチナに冠たりと云ふに於てをや。是に於てか余は遂に意を決して單獨旅行の途に上ぼる。馬車は三頭立にしてイシマエルと稱する土人の馭者と、エリシヤと稱する英

語を能くする老案内者同乗す。

舊約の史蹟

テートス丘頂より最後の一瞥をエルサレムの都城に與へ、馬車は茫漠たる高原を北に馳りて、やがてエフライムの山地にかゝれば、此あたりは即ちヨシユアがエリコ城を攻め落せし餘勢を以て、先づアイの城を陥れ、ギベオンと好みを結び、アモク人の五王の聯合軍と戦ひ、連戦連勝してイスラエルの軍威を示したる古戰場なり。アイ、ギベオン、ラマ等の古趾今も山間に望みつべし。更に創世記時代の古跡としては、ア

ブラハムが初めて天幕を張りて祭壇を築き、ヤコブが天に達する梯を夢み、覺めて其枕せる石を建て、エホバの神に誓を立てしベテルあり。尙後代の史蹟たるラマラ、エシヤナ等の邑は、今や基督教徒の村落として、ラマラの如きはエルサレムに住む歐米人の避暑地たり。目下新しき學校の建築中なるを見たり。

馬車は絶えず山又山の間を縫ふて北に向つて走り、サマリヤの國境に近づきし頃、路傍の斷崖の下に一泉あり。名けて『盗泉』と云ふ。此邊昔は盜賊の住家なりしと見ゆれど、

今は坦々たる車道開けて些の危険なし。北方旅行の危険を云云するは、更に北方の原野に於けるベドゥン蠻族の間に深入りする場合を指して云ふなり。數月前一人の米國人彼等の爲に銃殺されたりと聞けど、そは必要なき冒險を試みしが故のみ。ベドゥン族は今尙ほ牧畜を業として、天幕を隨處に張り牧草を逐ふて移住す。余の馬車も幾たびか彼等の間を通過せしが、彈丸を以て微笑に酬ゆる人鬼とては有らざりき。

サマリヤの平野

エフライム山脈の北に向つて盡くる所、坂は急勾配をなし

て電光形に屈折して下る。山下に土鰻頭の如き一旅亭あり。ルバン亭と稱す。此處に一清泉あり。綠樹其傍に繁る。無數の牛羊及びダマスコよりの隊商の駱駝憩ひて水を飲めり。時正午を過ぎたれば吾等も亭内に入り牛羊の間に伍して携ふる所の晝食を喫す。薄ぬるき風よと思ひて不圖頭を上ぐれば一頭の駱駝の鼻息荒く窓の外より首さし入れたるなりき。

此處はユダヤとサマリヤの國境にして、地味礪確なるユダヤの山地は盡きて、綠草叢生のサマリヤの平野こゝに始まる。春は緑の毛氈をしきつめたるが如しといへど、盛夏の今

日夫程の沃野ども思はれざりき。只だ地は比較的に能く耕され、牛羊の群野山に點綴すること遙かにユダヤよりも多きを見る。

ヤコブの井戸

やがて幾つかの廣野を過ぎて再び山路にかゝり行けば、前面に形美はしき一大高山あり。是れぞサマリヤ人がエルサレムに對抗して神を拜せしゲリジム山なり。彼のサマリヤの婦が『我儕の列祖は此山にて拜しに爾曹は拜すべき所はエルサレムなりと云ふ』と論つらひしは即ち『此山』なり。今は

回教徒の遙拜所らしきもの其の絶頂に立てり。細き一帯の谷を隔て、エバルの高山あり。此二山の間にはヨシユアはエルサレムの民を集めて祝福と咒詛にかゝる凡ての律法を誦めるなり。(約書亞書八の三三)

谷の一端にポブラらしき木の茂れる一劃の地あり。白き土塀もて取圍まれたり。其中に『ヤコブの井』ありと聞きて、余は少からず興味を殺がれし心地せるも、導かるゝまゝ車を下りて其門に入る。場内は今や新しき會堂建築の最中にして、石を切る音、人足の聲、騒然として空谷の閑寂を破る。

土砂石片の間を通りて半ば落成せる會堂の下、ヤコブの井戸の傍らに立つ、繪畫などに見し綠樹の蔭の古き井戸は全く其影を没して、新しき石もて積み上げられたる口径三尺ばかりの井桁の上には、鐵製の滑車と鉦力の釣瓶かゝれり。午睡を破られたる番僧は無精らしくも我等の爲に燭臺に數本の蠟燭を點じ、滑車に吊して井底を覗かしむ。井底は思ひしよりも廣くして、直径一丈もありつらん、深さ七十尺、苔蒸す石層の間より清泉滾々として湧き出づ。余は請ふて其水を汲み上げ、一氣飲み盡くして全身の渴を醫す。其味ひ清冽言ふべか

らず。促がさるゝまゝ賽錢を納め記名簿に名を署して出づ。あゝ甚だしくも俗化されたるヤコブの井よ。苔青き古井戸の石に踞して、サマリヤの婦と語り給ひし主の遺跡今やいづこぞ。我は既に建築の美を以て神聖を保たんとするエルサレムの名所に飽きたり。遙か百里を遠しとせずしてエダヤ、サマリヤの山野を辿り來りしは、そこに自然の天空の下に昔ながらの聖足の跡を探らんとてなり。然るに見よ俗僧利に敏くして自然の神聖を解せず、こゝにも壯麗なる會堂を建てずんば已まざらんとす。苦々しき限りかな、余は少からざる失望

を以て門外に出づ。

然かも翻つて思へば余も亦誤れり。自然に執着して人工を罵るも亦同じく外形に捉へられたるならずや。婦よ我を信せよ、唯に此山のみならず又エルサレムのみにも非ずして爾曹父を拜すべき時來らん』と訓へ給へる主の御聲を聞け。眞の拜する者靈と眞を以て父を拜する時來らん』との其時未だ我が上に來らざるか。神よ我が信なきを憐み給へ。余は今基督の聖跡を目に見ゆる國土にたづねて、目に見えぬ我靈の中に神の子の在すを忘れたるなり。『此水を飲む者はまた渴か

ん、然ど我が與ふる水を飲む者は永遠に渴くことなし、且つ我が與ふる水は其中にて泉となり湧出で、永生に至るべし。』ヤコブの井戸はゲリジムの麓にあらずして我等各々の心に在り。汲めよ、汲めよ。永生に渴くことなき活ける水を汝の靈泉に汲めよ。眼を閉ぢて黙想すれば彼の井戸の傍に座してサマリヤの婦と物語り給ふ我主の聖姿、髣髴として我が心眼に浮び來るを覺ゆ。

エバルの山腹東に面せる處にスカルの寒村白く立てり。水瓶を頭にのせてサマリヤの婦たちは今も尙ほ其坂を登りゆく

なるべし。ヨセフの墓なるもの同じ谷間に在り、そこに回教徒の圓堂、橄欖の林の上に立てるを見る。

ナブルスの一夜

岩角嶮しきゲリジムを左に、霸王樹茂れるエバルを右に、馬車は石高き道向西に向つて疾驅し、やがてサマリヤの首府ナブルスに着す。ナブルスば古のシケムにして、舊約の歴史に重要な位置を占めし所、今は土耳其政府の諸官衙及び兵營あり。人口約三萬、エルサレムに亞ぐパレスチナ第二の都會なり。

南北に二山の天險を負ひ、西は地中海に至る要路を扼し、東はヨルダン流域の平野に臨む。天然の地勢を以てすれば、全パレスチナの首府としてエルサレムに優ること萬々、土耳其が銳意此地の發達を圖るも宜なり。今や架設中なるダマスコよりの鐵道一二年の後には此地に達すべく、然らばエルサレムの繁榮は半ば此地に移ることなしとせず。

ナブルスには獨佛人の旅館あれども、余は節約の目的を以て天主教の一宿坊に投宿す。老教父懇ろに余を遇し、日本人にして投宿せるもの君を以て四人目なりと語る。

日尙ほ高ければ、エリシヤの先導にて、黒衣覆面の町の女等が多く墓詣でしつゝある屋後の墓地を通り、此地の一名物たるサマリタン派の會堂を訪ひ、其寶物たる羊皮の巻物に細書せるモーゼの五經を見る。第一世紀の寫本なりとは信じがたきも、少くとも千年位は經たるものならん。主イエスがナザレの會堂にて讀み給ひしイザヤの書もかゝる巻物なりしなるべし。

サマリタン派とは猶太教中の最も頑固なる古義派にして、其宗徒ナブルスにあるもの僅かに七八十人、全世界を通じて

二百人を出でずと云ふ。他宗者と結婚せず、多くは貧困にして歐米好事家の慈善に衣食すと云ふ。博學のエリシヤ熱心余に告げて曰く、サマリタンは其昔イエスに水を飲ませざりしが爲に神に誑はれて此の慘狀を呈せりと。サマリヤの婦とサマリタン派とを混同せる此の解釋には一笑を禁せざるを得ざりしも、血族結婚の結果が人種學上の呪詛を受けつゝあるは事實なるべし。

ナブルスの住民は此少數の古義派猶太教徒を除きては全部回教徒にして、而かも彼のヘブロン回教徒と等しく、偏狹

熱烈、人氣頗る殺伐なり。されば基督教徒と見れば、往々迫害を加へ、歐米の旅客にして兒童の爲に石を投せられし者多し。現に數週前一米國婦人が石垣の上より人頭大の石を投げられて負傷し入院二週間に及べりと云ふ。薄暮の散歩は危険なればとてエリシヤの促がすまゝ、匆匆歸院し、食後階上のウイランダに涼を納れて九時就床す。寢室に蚊帳なし、蚊と南京虫に攻められ、加ふるに無数の野犬遠近に吠吼して眠りを妨げ、展轉反側、曉に及ぶ。此日エルサレムよりナブルスマでの里程約五十哩、車行十時間。

古サマリヤの都

翌拂曉戸を叩くものあり、エリシヤなり、曰く馬車の用意成ると。匆匆朝餉を取り、宿料八フランを拂ひて宿坊を出づ。

日未だ昇らず、ゲリジムは黒くエバルは霞み、ナブルスの町は眠る。朝風膚に冷たく肥馬露を蹴たて、馳る。行くこと一時間にして一高丘の下に着す。丘頂に古イステラエル王國の首府サマリヤの都趾あり。馬車を山下に降りエリシヤと共に登る。芭蕉、霸王樹、橄欖の間を縫ふて山上に達すれば、こ

こは即ちヘロデ大王の居城セバスタヤの跡なり。徑二尺高さ一丈餘の花崗石の殘柱三四十本狼藉として小徑の傍に立つ。宮殿の庭と思はるゝ處あり、劇場の廢墟と思はるゝ處あり、夏草茫茫として茂り、石間蟋蟀の啼く音悲し。

村内に古寺あり、其中にバブラスマのヨハネの幽囚されしと云ふ深さ二三丈の土牢あり。鎌倉なる護良親王のそれを見る心地す。『サロメ』の悲劇は此處に演せられしならん。王者の榮華今やいづこ、預言者の雄姿今やいづこ、共に是れ二千年前の夢の跡。

やゝ下りし處に周圍三丈もあるべき花崗石もて疊める二大石柱の道の兩側に立つあり。是れサマリヤの都門の跡なり。當時の壯麗想ふべし。更に丘陵を斜めに攀ちて山頂に達すれば、そこにも亦た近年土耳其政府によりて發掘せられたる宏壯なる宮殿の跡あり、或はヘロデの居城なりしなるべし。西面の階段の下に頭首を失へる巨大なる大理石像の横はるを見る。蓋し羅馬皇帝オグスタスの立像ならんとの説あり。彫刻の美見るべきものありき。

山上の眺望絶佳、加ふるに天然の要害を以てす、二千年前

のバレスチナ鎮守府として絶好の位置を占めしものならん。
山を下りて西麓に廻し置ける馬車に乗る。此サマリヤ古都の
探險に約二時間を費しぬ。

孤村の井邊

暑熱漸く烈しく道路漸く険しく、鐵道敷設隊の天幕地を過
ぐるに幾つか。行くこと更に數里にしてシーリーと稱する
山下の孤村に達す。井戸あり、老若の村女石瓶を頭べにし來
り、駱駝牛羊その流に水呑む。往昔ヤコブの井戸も斯かるも
のにてこそありしならむ。余も馬車を無花果樹の下にとど

め車中にありて休憩し寫生など試む。他に二臺の馬車あり。
一は小學教員らしきが五六の少年を伴ひて乗れるなり。他の
一つは十三四より十六七までの洋装の少女七八名を乗せた
り。始めて日本人を見たる彼等は臆する色もなく來りて余の
馬車を圍む。聞けばベテレヘムなるミツシヨン女學校の生徒
にして暑中休暇に郷里ナザレに歸るものなりと。皆な快活に
して英語を能くし、問へば争ふて答ふ。余にも御身等の年頃
なる娘あり、獨り學校に残して來りぬと語れば、我子に似た
る一人の少女、眼を潤はしつゝ「オー、アイ、アム、ソーリ

「、フオア、ハー」と云ふ。可愛らしき同情の言葉かな。
思へば幸多き娘達よ。思出聖きナザレの村里に生れ、名も
慕はしきベテレヘムの邑に學ぶ。やよ御身の父は木匠にはお
はさずや、御身の母はマリヤとは名のり給はずや。樂しき夏
休みに家に歸りて何事をか物語りたまふ。弟妹にはベテレヘ
ムの如何なる土産をや携へたる。……………
我思ひ何時しか故國の空に馳せて、獨り黙して我子の上に
幸を祈る。

ドタンの水

憩める馬は勢よく走り、山を越え野を横ぎりてやがてドタ
ンの村に達す、こゝは舊約の大立物たる少年ヨセフが父に命
せられて羊を牧へる十人の兄弟に尋ね會ひ、嫉める彼等によ
りて坑内に投せられ、エヂプトの隊商に賣り渡されし處な
り。大いなる泉あり、ヨセフの坑の跡なりと稱す。旅人は入
りて浴し、家畜は其流に飲む。此あたり水多き處にして古來
好個の牧野なりしならん。パレスチナに入りて茲に初めて、
各種の草木繁茂せる温帯地方の村落らしきものを見る。パレ
スチナの生命は水なり。水の尊きを知らざる日本人には洗禮

の意義を解すること難し、洗禮は洗ひにあらず蘇生なり、復活なり。余はバレスチナに來りて『水と靈』との意義を思ふこと深し。

エニンの木蔭

櫻欄繁げ昔のエンガンニム今のエニンの村に着きしは午後の一時頃なりし。旅亭には入らず、町端の人家の後庭、無花果の樹下、水瓜など冷せる小川の傍らを借りて一脚の卓子を持ち來り、エリシヤ、イシマエルと共に携ふる所の辨當を開く。好物の無花果累累として頭上に熟す、採りて食ふ、味

ひ言ふべからず。喪家の犬あり、尾を掉りて來り卓下にうづくまりてパンの屑を食ふ。主に答へしサイロピニケの婦の言葉など思ひ起す。エリシヤ、町に出で、大いなる水瓜を求め來る、水に冷して割る。半日の疲勞去つて行く所を知らず。

エストレロンの平原

再び馬車に上りサマリヤの國境を越えてガリラヤの平原に入る。エルサレム附近のユダヤの山國は多く不毛の地、サマリヤ一圓の山野は水ある所のみ青し。然るに一步をガリラヤの平原に入れば満目悉く是れ緑の野、紫の原、黄金色な

す麥の垂穂は波うちて利鎌を待ち、櫻欄、橄欖、果樹、野菜、
到る處に叢生す。エスドレロンの平原は一名エズレルの野、
パレスチナ第一の平野なり。北はガリラヤの丘陵蜿蜒として
連なり、西はカルメルの山脈遠く地中海岸に走り、南はギル
ボアの嶺つゞきなるサマリヤの山々を望み、東は小ヘルモン
山とギルボア山との間より直ちにヨルダン流域の平野に接な
る。三方是れ山、一方最れ河、其間東西十二三里南北七八里
の沃野茫茫として一物の眼界を避るものなし。眞に是れ雄大
の景、廣濶の天地。余はナザレに近き此平原の眞只中に立

ちて、神人を育てし自然の恩寵の決して偶然ならざるを想
ふ。

馬車は涯しなき麥圃の間を南より北に此平原を横切りて進
み、やがて前面のガリラヤ丘陵の上に白く耀やくナザレの邑
を望む。嗚呼是れ余が二十年間憧憬のナザレか、我心躍りて
已まず。急げぐ余は早く我主の故郷に入らんことを願ふ。

ギルボアの山麓には、昔イスラエル人がペリシテ人に對し
て陣取れるエズレルの跡あり。之に對する小ヘルモン山の麓
には、ペリシテ人の陣せるシユネムの跡あり。遠く望めば二

つの陣地は石も投げつべき距離なり。シユネムは又預言者エ
リシヤが一婦人の子を甦らせし處なり。今は見る影もなき
小村なれど、舊約の歴史は此エズレルの野に多くの舞臺を有
す。ギルボアの北麓にはギデオンがイスラエルの勇士に水を
飲ませて其三百人を選抜せしと云ふ泉もあれど、道寄りなれ
ば往きて見ざりき。

變貌の山

小ヘルモン山とナザレの立てるガリラヤ丘陵との中間に形
美はしき兜山あり、タボル山即ち是れなり。主が變貌の山は

或は此のタボル山なりと云ひ。或は彼の小ヘルモン山なりと
云ひ、何れの山頂にも變貌に因める修道院建てられ居れど、
余は其あたりの地形より推察して、タボル山よりも遙かに高
く人跡稀れにして山巔雲を戴く小ヘルモン山の方が、恐らく
其地なりしならんと思ふものなり。小ヘルモン山は其形スリ
ヤの最高峯ヘルモン山に似たるより斯くは名けたるもの、二
山の距離は百哩以上もあることなれば、二者を混同せる日本
の説教者が單に『ヘルモン山上の變貌』を云々するは謂れな
かごとく知るべし。

ナザレの自然

近く見えても遠きは廣原の眺めなり。白く耀くナザレの邑を丘上に望むこと約二時間にして、夕陽西の方カルメル山に白くころ、漸く丘陵の峻坂にかゝる。車を下りて坂を登り、岡を繞りて又車に乗り、ナザレの村端セルマン、ホテルに着したるは夕風寒き六時過なりき。

ナザレはエスドレロンの平原を北に劃するガリラヤ丘陵の中腹、凹字形をなせる一小平地に在り。摺鉢の底と云ふほどにもあらねど、南の方遠くエスドレロンの展望を恣にする

の外、三方丘陵に取り圍まれて、宛から生ひ茂る樹の間に構へたる小鳥の巢の如く、閑かにも住み心地よかるべき處なり。深山大澤龍蛇を生ずとは支那の諺なれど、夫れほど幽邃の僻地にもあらず、況や全く人里を離れたる印度の雪山のそれにもあらず、謂はゞ自然の懷に抱かれし世の常の村里とこそ云ふべけれ。天國の福音を地上の人の子に傳へつゝ而かも全然出世間的ならざる基督教の發祥地として、ナザレの位置と風光とは最も意義深き暗示を與ふるものと云ふべし。基督教在の當時には四通八達の要路として、異邦の文物も多少此

地に入込みしと覺しく、ガリラヤの一小邑として割合に般
販の巷なりしと傳へらるれど、今は基督の故郷として世界の
巡禮者を吸引するの外に、交通其他の點に於て左して價値あ
る土地にもあらず。巡禮季節ならぬ今日此頃は、手狭き巷路
も行人稀にして、何となく物靜かなる氣分は、得も云はれず
心地よし。

エルサレムの雜間に幾分飽きたりし余はナザレに於てこそ
思ふまゝに自然の恩寵に浴せんと志したるなれば、或はマ
リヤの住宅の跡、或はヨセフの木匠の場、或は聖母の泉など

數多き例の名所舊蹟は大方見過ごしにして、直ちに歩みを昔
ながらの街路の方に運びつ。とある大工の店先に佇みて髯多
き一老工の家具らしきものなど造り居るを見つゝあれば、年
の頃十四五歳とも覺しき一少年が、二三枚の板を小脇にかゝ
えて何處よりか歸り來れるなり。見れば手足もあらわに僅か
に胴部を掩ふ丈の汗じめる仕事着をはをり、東洋風の帶も
て腰のあたりを束ね、靴は素足のまゝに穿けり。慕はしき少
年よ、惻發らしき面影に何處となく愁の雲の漂ふは、御身も
若くして貧き家計の重荷を負へる爲めか。主の在りし昔も斯

くやと惚しのばれて、目を放はなたす見みつゝあれば、彼は恥はづかしげに戸とを排はいして奥おくに入りぬ。奥おくには母ははなる人ひとの聲こゑらしきが聞きえたれども、其その顔かほは見るを得えざりき。

總そうじて氣きの故せかは知しらねど、ナザレの住すま民みんは其その容よう貌ぼう何なんとなく氣け高たかく、中なかには白はく哲てつ人じんも及およばざるほどの見み目め麗うるはしき少女せうじやうの街がい路ろに遊あそび居をるを見みる。二に三さんの村むらの娘むすめ等ら手て製せいのレレススなごを賣うらんとて我わが跡あとにつき來きたるあり。巧たくみなる英えい語ごを以もつて切せつに勸すすむる一せう少じやう女じやより、余よは紀き念ねんの爲ために我わが子この袖そで口ぐちにふさはしと思おもふ品しなを三さん尺じやくばかり求もとめやれば、『サンクユー、サー、アメ

リカン、ゼントルマン』と云いひすて、走はしり去されるも可お笑かしかりき。主しゆイエスが初はじめて故ふる郷きやうにて説せつ教けうし給たまへりと云いふ會シナゴーク堂だうは彼か處こに在ありと告つげくれし村むら人びともありしが、固もとより信しんじがたき傳でん説せつにして、日ひのあるうちヨリ多おほく自し然ぜんを見みばやと急いそげる余よは往ゆきて見みず。狭せまき坂はん路ろの巷ちまたを上のぼりて人じん家かの後うしろに出いで、橄かん欖らんの樹きのまばらなる畑はたけを通とほりて、夏なつ草ぐさ茂さる小こ高たかき丘かみの上うへに達たつし、石いしに踞きよして暫しばし四はう方ほうの眺ながめを樂たのしむ。

自然と天啓

あゝ美うらはしきナザレの夕ゆふ景けい色しきよ。日ひは早はやや西にしの山やまに落おちて

殘照次第に彩雲の間に消え行き、東の丘サイブレスの樹立の上には十日の弦月淡く懸れり。南の方エスドレロンの平原は一望十里夕霞のうちに煙り、小ヘルモン、ギルボアの山々は眠るが如くそのかなたに横はる。背後を顧みれば近くナザレ一帯の丘陵には、白聖青彩の教會、孤兒院、學校、病院、修道院の類、競ふが如くに建て列なり、やゝ太古の趣きを損ずる嫌ひはあれども、是れ亦世界の基督教徒が其救主を育てし聖地に幾分報恩の誠を捧げつゝある表象かと思へば、左して目障りとも覺えず。そよ吹く夕風は橄欖の木の葉を渡りて何

物かを我にさゝやくが如く、夜露にぬるゝ草花は昔ながらの天父の恩寵を物語るに似たり。眼を閉ち腕を組み静かに瞑想すれば、祈りは自づから我が靈の奥より湧く。あゝ感謝すべきかな、我れ生れて天地の神を知り、基督の救に與かり、今や來りて其慕はしき主が故郷の空に在り。想ふに我主も一日の勞苦を終へて、獨り靜かに此丘の上に登り、天父の靈交に入り給ひしこと幾度びぞ。あはれ神人を育てしナザレの自然に永久に祝福あれ。

然かも翻つて思へば、飽まで奇しきは主の隠れたる三十

年間の私生涯にてあるなり。ナザレの村人と起居を共にし、世の常の生業を営みつゝある間に、自然は果して如何なる教訓を彼に與へ得たるか。天啓の光は如何にして其心靈の奥に閃めきたるか。其絶大至高なる神の子の性格は如何にして一木匠の子たる彼のうちに形造られしか。想へば世界最大の神秘は實に此一事にあり。ナザレの自然美しからざるに非ず、イスラエルの歴史偉大ならざるに非ず。其幾多の英雄偉人を起し、幾多の聖者豫言者を産みし理由は、之を解するに難しとせず。然かも此自然と此歴史とが神人彼れの如きを産み出

すの力ありしとは、余に於て到底解し能はざる所なり。大なる自然は確かに大なる人物を産むべし。されど自然は神の子を産むこと能はず。余は此ナザレに來りて愈よ我主イエス、キリストの神性に對する確信を強むるを得たり。彼は斷じて自然の産める人の子にあらず、全く特殊なる天啓の力によれる神の子なり。自然と天啓との異同を論じて余の言を責むるを休めよ。余は之を知らず、知るも之を論ずるを欲せず。唯だナザレ丘上の一種の靈覺は余をして斯く斷言せざるを得ざらしめたるなり。感謝す、我が美はしきナザレの自然よ、汝

は神人を育つるに適せり。されど汝は神人を産みしにあらず。彼は初めより神の子なり、人にして神となりしにあらず、神にして人となりしなり。我が此一片の確信は聖地巡禮の最大の賜物なり。此信念を興へられたるに於て我が此旅行の目的は達せり。言ひ難き、種無限の靈感に打たれつゝ、余は燈影疎らなるナザレの巷路を辿りて村端の旅宿に歸る。

ナザレの人口約一萬、大部分は基督教徒なれども中には回教徒、猶太教徒も少からず。歐米人の傳道及び教育は却々に盛にして見るべき事業も多しと云へど、余に其の暇なきを憾

む。神の子を育て、然る後に之を排斥せるナザレ人に、報恩と愛の奉仕とを捧ぐる凡ての基督教的事業に、上よりの祝福あれ。

ナザレの一夜

此夜月明かにして星稀れに、冷風膚に徹す。ホテルの涼臺に出で、獨り静かに二三の讚美歌などを吟さみ、入りて燈下に路加傳第四章十六節以下を読む。

『その長育し所なるナザレに來り常例の如く安息日に會堂に入りて聖書を讀まんとて立ちければ、豫言者イザヤの書

を手へしに、イエス其書を展きて斯く録されたる所を見出せり。

主の靈われに在す、故に貧者に福音を宣傳へんことを我に膏を沃ぎて任じ、心の傷める者を醫し、又囚人に釋さん事と瞽者に見させん事を示し、又壓制らるる者を縦ち、主の嬉ばしき年を宣べ播めんが爲に我を遣はせり。』
嗚呼是れ福音の第一聲、主が先づ之を己が故郷の會堂に於てせる、人情の最も至醇なるものにあらずや。然るに頑迷なるナザレの村人は此恩寵の言を聞きて却つて怪み『此はヨセフ

の子に非ずや』と云ひて彼を唾棄しぬ。果せるかな豫言者は其家郷に於て尊ばれざりき。燃ゆるが如き確信を以て『看よ此録されたる事は今日爾曹の前に應れり』と宣傳せるイエスの失望や如何なりけん。失望は變じて嚴肅なる譴責の言となりぬ。憤怒に驅られしナザレ人は彼を會堂より曳き出して、村端の懸崖より將さに彼を投げ落さんとせり。此崖今尙ほ村の西南端に在り。イエス辛くも身を以て遁れ、去りてガリラヤのカペナウムに往き、生涯再び其故郷の地を蹈み給はざりき。

かくて懐かしき故郷のナザレは主イエスが最初の迫害の地となりぬ。人生悲劇の幕は早くもこゝに開かれたり。『彼れ己の國に來りしに其民之を接けざりき』と約翰が其福音の卷頭に記せし一言は、よくも簡潔に主が地上の生涯を言ひ表はせるものなるかな。『われ愈よ爾曹を愛すれば愈よ爾曹に愛せられず』と保羅の言ひしは凡ての志士仁人の心事を言ひ表はせるものながら、主イエスの經驗し給へる愛の苦痛の程度に至りては、恐らく何人も其深さ廣さを測る能はざるものあらん。げにイエスは此美はしきナザレを去りて再び歸り給はざ

りた。 "He left his own country never to return again!" 茲に

堪えがたき悲愴の情調は存せずや。

昔を想ひ今を思ひ、感慨盡くる所を知らず、十時祈りて寢に就く。此日車上の行程二十五哩、旅に疲れし身のナザレ一夜の夢は幸ひにして圓かなりき。

カナの聖日

翌朝六時起床、旅装を整へつゝあれば、老エリシヤ來り告げて曰く、駁者イシマエル馬と己れの疲れし故を以てテベリヤに行くを欲せずと。乃ち新たに馬車を備ふ爲めに半時を費

し、途中より旅客を同乗せしめ得るの約を以て、肥馬一鞭、七時別れをナザレに告ぐ。

此日は聖安息日なり。澄み亘るガリラヤの空、旭日麗かに耀き朝風征衣を翻へす。時日許さば此日をナザレに守るべかりしを今夜遅くもハイファ港を船出せざるを得ざるを如何せん。ナザレの丘を登りつめ、乗心地よき高原の平地に出でし時、衣囊の聖書を取り出で、讀む。ガリラヤのカナは次の宿場と聞けば、先づ約翰傳の第二章を繙く。『第三日にガリラヤのカナに婚筵ありしがイエスも母も此に居れり』味ひなき水

を甘酒に變へし主が第一の奇蹟は、此地の婚筵の席にて行はれしなり。エダヤ、サマリヤの地を経てガリラヤに入れば、天地は茲に一變して宛ら舊約より新約に讀み移るの感あり。舊約の預言者はかしこに在り、新約の救主はこゝに在り。前者はイスラエル王者の戦場の跡なり、後者は世の罪を負ふ神の子の故郷なり。エダヤ、サマリヤは秋の嵐を聯想せしめ、ガリラヤは春の朝を聯想せしむ。空明かにして氣閑なるガリラヤの自然よ。爾は世の救主の福音を初て宣傳せらるべき好個の境地なりき。水は變りて酒となり憂ひは變じて喜びとな

る。人生の奇蹟は此處に實現の端緒を開きぬ。主が傳道の首途は宛がら婚筵の蓆の如く歡喜と希望とに満てるものなりき。余をして暫し城壁嚴めしき王者の都を忘れしめよ、春光和氣の漲ざりわたる此ガリラヤの大空の下に、靜かに神の子の跡を辿らしめよ。

眼をあげて見れば、夥しき霸王樹の生垣に取圍まれしカナの小村は近く我等の行手に在り。村端に車をどめエリシヤを伴ひて村に入る。朝まだ早きに教會の鐘は遠近に鳴り、晴衣をつけし村の老若男女は打語らひつゝ、其音の方に歩む。此

處には天主教と希臘教の二教會あり、何れもカナの婚筵のありし處に建てられしと傳ふ。先づ希臘教の方に入れば衆僧今しも勤行の最中にて、村の少女は或は立ち或は跪きて讚美歌を誦誦す。酒に變りし水の甕は祭壇の傍らに在り。其形我邦の臼の如く又盟手鉢の如し。兒童の群に入りて少時禮拜に列りて出で、轉じて天主教の寺院に詣づれば、茲には一僧少數の男女に向ひて熱心に説教中なり。エリシヤ告げて曰く、彼の僧は嘘をつく者は地獄に行くべしと説教しつゝありと。余は此單純なる説教に滿腔の同感を表して出づ。歸路貧しき

少女の小さき石鑿の土産品などを勸むるあり、價を聞けば
夥しく高し。三分の一に値切れとエリシヤは告げしも、さ
る罪を犯さず、辭して車に乗る。

説教の山

カナを出で、東北の高原を行くこと二三里にして謂ゆる
『説教の山』に達す。山とし云へどテベリヤ湖西一帯の丘陵
の間に横はる一小平地の中央に、少し小高き岡をなして、宛
から天然の教壇らしく思はるゝもの即ち是れなり。野には夏
草生ひ茂りて優に四五千人を坐せしむべく、ガリラヤ湖畔の

都邑を距ること左程遠からねど、少時此世の雜鬧を避けて静
かに天國の福音を宣べ傳ふるには此上もなき好適の地なり。
位置といひ地形といひ古來『説教の山』として傳へらるゝは
信すべき理由あり。

『イエス許多の人を見て山に登り坐し給ひければ弟子達も
其下に來れり。イエス口を開きて彼等に説へ曰けるは、心
の貧き者は福なり、天國は即ち其人の者なれば也』

朗々として底力ある主の御聲が野の静けさを破りて、人々の
心の耳に鳴り亘りし日を想ひ見よ。余はカナよりの同乗者た

るダマスコの商人に請ひて、暫し車を路傍にといめ、獨り歩
みを教壇の小山の方に運びつ、草に座して静かに在りし昔の
事を想ふ。看よ野の百合は今も昔の如くに香り、空の鳥は昔
ながらの曲を奏す。自然は古への自然にして天地は何時まで
も悠久なり、されど此小山の上に座して人の子を訓へ給へる
主の御姿は今や何處。主去り給ひて茲に二千年、時の流れは
過ぎし歴史の泡と消え、今を昔にするよしなけれど、幸ひな
るかな我等の靈の琴線は一たび此處に奏でられし天の音楽に
永へに共鳴するを得るなり。感謝の念に満ちて、紀念の爲に

野の花二つ三つ手帖の間に挿みて歸る。

ガリラヤの湖

説教の山を後にして行くこと一二里、満目暗褐色の禿山を
上り下りつ、とある行手の丘を登りつむれば、忽ちにして眼
下に深碧の湖水を見る。目も覺むるばかりの緑の水は、周圍
の黄褐色の山々と照應して、得も云へぬ美しさ、是ぞ名に負
ふテベリヤの湖(一名ガリラヤ湖)なるかと思へば、我心は
湖面の静けさにも似ず、時ならぬ波を躍らす。ユダヤの死海
を毒杯の底に譬ふれば、ガリラヤの湖は乙女の瞳になぞら

ふべし。死の恐怖はかしこに在り、生の歡喜はこゝに湛ふ。
美しきかなテベリヤの湖、眼を放ちて對岸東の方を望めば、
デカポリス、ガダラの山々は蜜柑の皮をも欺くばかりなる濃
褐色の屏風をなして、鏡の如き碧の水際に立ち列り、北の方
靄たれこめし紫の空には、遠くヘルモン山の白雪を望む。
テベリヤの邑はこなたに在り、カペナウン、ベテサイダの跡
はかしこに在り。主が傳道の第一期は此美はしき閑寂の天地
に過ごされしか。人類救拯の福音は山紫水明の此ガリラヤ湖
畔に傳へられしか。満目荒寥たるユダヤの山野をして主の死

の莊嚴を飾らしめよ。清明和光のガリラヤをして永へに人生
の祝福を謳はしめよ。

神の恵みはいそ高し 仰ぐ高峰の白雪に

朝日匂へるヘルモンの 山にもまさり高きかな。

神の恵みはいそ深し そこひ渚を打つ浪に

夕日輝くガリラヤの 湖にもまさり深きかな。

惘然として自然に酔ひし車上の我は、聲を限りに讚美歌五十
六番を高吟すれば、ダマスコの商人も手拍子をうちて之に和
す。君も一つ謳はずやと勸むれば、スリヤの俗謡らしきを一

つ二つ 謠ひぬ。

テベリヤの邑

車は石多き險坂を射るが如くに疾驅し、湖は歩々に其姿を現はす。思ひしよりも大なる湖水なり。昔は湖の西南岸一帯の地に十個の都邑もありしと聞けど、今は只テベリヤのみ残りて他は僅かに其廢墟を存するのみ。時間あらば小舟を賃してカペナウン、ベテサイダ、マグダラ、コラジンなどの舊跡を弔ふべきなれど、行程限りあれば惜くも湖岸の探勝は試み得ざりき。

正午を少し過ぐる頃炎熱煎るが如きテベリヤの邑に達し、直ちに車を下りて湖岸の一小亭に入る、一小亭と云へど自然の岩窟を利用せる旅人の休憩處にして、スリヤ人らしき主人が濃き珈琲など勧む。ナザレよりテベリヤまで行程七里、旅と熱とに疲れし身を地べたに布きし蓆の上に横へて休む。洞内には燕雀自由に入出し、奥まれる所には蝙蝠の聲、巢のうちより聞こゆ。エリシャ一脚の破れ卓を持ち來り、例の辨當を開き、ナザレより持ち來れる大西瓜を破りて食を勧む。食後水際に下りて、冷たき湖水に顔などを洗ひ、邑の子等の

游泳の様などを見る。我も一浴を試みんと衣を脱ぎに歸れば、エリシヤ炎天の水浴は毒なりと制して已まず、老人に心配させても濟まじと思ひ止まる。

げにテベリヤの苦熱はエリコ死海のそれに劣らず、かなたには半ば裸體にして水際の舟に網つくるひ居る漁夫あり。こなたには脛も露はに水に入りて洗濯しつゝ、打語らふ村の女達あり。ヤコブ、ヨハネもかゝる漁夫の仲間にてありしか。マダラのマリヤもかゝる村女の一人なりしか。斯かる平凡無智なる野人匹夫の間より、僅か二三年間に十二の使徒を起し

給へる主の感化の偉大なる力を想ひ見よ。さるにも主が説教の如何に單純平易なりしか。『比喻にあらざれば語り給はず』と記されし理由も斯かる漁村の男女を目撃せる我には明かに解せらる。想へば偉大なるは眞理其者の力なるかな。一たび主の唇より落ちし神の國の福音は、ガリラヤ湖邊の漁夫の心にも、ヨルダン河岸の牧夫の心にも、宛がら暗夜を破る電光の如く閃き亘りて、光は火となり、焔となり、終に全世界の人々の靈より靈に燃えうつりて、茲に二千年の間の『凡ての人を照らす眞の光』とはなりぬ。眞理は光なり、光は生命

なり、生命は力なり、真理の前には時間もなく空間もなし。
あゝ莊嚴なるかなガリヤ湖邊に耀きし真理の光、偉大なる
かなナザレの寒村より漲り出でたる生命の水。

湖上の眺め

やがて汽船の笛は鳴りぬ。エリシヤに促がされて小さき棧
橋より船に乗れば、遊客商賈數十人甲板の上に在り。猶太の
少年とスリヤの老翁の間に座を占めて、擅まに湖上の眺めを
樂しむ。古テペリヤの城廓は湖岸の廢墟に昔の名残を留め、
遠くカペナウン方面の沃野は黄褐色の山の麓に點々の緑を劃

す。ガダラ地方の山々は湖の東岸に峙ち、豕の走りて崖よ
り落ちしと云ふ處は彼處あたりなるべく、四千人に食を與へ
給へる奇蹟の野は西岸のこのあたりなるべし。さても小舟の
上より多くの人々に説教し給へる岸邊は何處ぞ。味爽水上を
歩みて近づき給へる主を見て弟子等の驚き怖れしは何處ぞ。
颯風忽ち起りて船將に覆らんとせし時、主獨り舳に枕して
眠り給へるは何處の沖合ぞ。思出多きテペリヤの湖上を我船
は波を蹴立て、無雜作に馳ること約二時間にして、南岸の村
落セマークの波止場に達す。こゝはヨルダン河が湖水より流

れ出づる處に近し。見るかげもなき小村ながら、定期船の發
泊所として鐵道の停車場として、テベリヤに亞ぐ此あたりの
要地なるべし。午後三時ダマスコよりの瀛車に乗り、地中海
岸ハイファに向ふ。

聖地に別を告ぐ

ガリラヤ湖岸セマークより地中海岸ハイファまでの旅行
は、エスドレロンの平原を東より西へ縦斷するものにして、
昨日ナザレに向つて南より北へ横切りしと直角の方向を取つ
て進むものなり。セマークの村端湖水がヨルダン河となりて

出づる處を車窓鐵橋の上より見る。蜿蜒として迂回せる川筋
は、生ひ茂る雜草灌木の蔭に隠れて、水勢緩く南に向つて流
る。余は曩に此川の死海に注ぐ處を見、今は此川の湖水より
出づる處を見る。清列玉の如き湖の水はユダヤの荒野を流
れ行くまに、何時しか滔々たる濁流となり、終に死海に入り
て酷烈なる鹹水となる。ヨルダン川をして若し其身の歴史を
物語らしめんには、恐らく幾多の興味ある暗示を與ふるもの
あらん。

ヨルダン川の流域を距ること遠からずして、瀛車はエスド

レロンの平原に入る。タボル山、小ヘルモン山を右手に望み、
やがてナザレの懐かしき邑は肅然として我を送るが如く、ギ
ルボアの山嶺なるカルメルの山脈は莞爾として我を迎ふる
に似たり。ベドゥン族の牧畜の天幕は鐵路の兩側に點々
し、外國より歸農せる猶太人の殖民地は此處彼處に廣大なる
耕地を有す。カルメル山脈は一面に橄欖、樅、櫟の林を以て
掩はれ、山の形勢樹木の繁茂は我日本の景色を聯想せしむ。
瀛車は夕陽に向つて馳ること四時間、櫻欄茂る地中海岸のハ
イファ港に着せるは午後七時過ぎなりき。

ハイファは昔のツロ、シドンの港の南方に位し、今はパレ
スチナ要港の一にして船舶の出入多し。余の船はケデービヤ
ル線の一巨船、土耳其政府の準御用船と聞けど、設備其他は
露國船の夫れに勝れりとも思はず、浪高き海上を舢に揺られ
て漸く本船に乗り移れば、乗客既に満員にして船室なし。各
國民の船客の間に雜りて夕食を濟ませ、此夜は已むを得ずサ
ロンの長椅子の上に眠る。翌朝ジャツファに着す。此處にて
聖地巡禮の客多く下船したれば辛ふじて二等船室に仲間入り
するを得たり。連日の旅行に疲れ果てし身は、或は入りて船

室に睡り、或は出で、甲板を散歩し、地中海上より最後の別
を聖地に告げて、翌朝八時ポルトサイドの港に歸る。斯くて
余がパレスチナ巡禮の旅は、七月四日ポルトサイドを發し
てより、十四日同じ港に着するまで全十日間にして、凡て豫
定の行動を取り、不完全ながらも一應聖地の舊蹟を訪ひ、聖
地の風光に接し、而して聖地の靈感到に浴するを得たり。

(因みに日本の郵船がポルトサイドに入港する迄に向ほ三日間の餘日あれば、
余はカイロ市に遊んで埃及警見をも試みたり。ナイル河を渡りてギザに至り駝
駝に乗りて大ピラミッドを一周し、スフィンクスの傍らに憩ひて六千年の昔を
偲び、世界に名高きカイロの大博物館にて歴代帝王のミイラを始めし埃及古
文明の殘骸を觀覽し、二泊して再びポルトサイドに歸る。尙ほ參考の爲め一書
を附せんに、余は短時日の間に無理の旅行を試みし爲め、經費は案外に嵩み、

パレスチナと埃及行を合せて二百五十圓を費せしも、更に儉約すれば百五十
圓位にても事足るべし。氣候は酷烈にして萬事衛生的ならざるも、余は一日も健
康を損せず、只たナブルスの一夜蚊と床虫にさゝられて、爾來一ヶ月間痒痛に苦み
しのみ。必要の旅具は白衣と毛布と色眼鏡と洋傘とヘルメット帽等なるべし。

結 尾

終りに臨み余は天父の恩寵に對し衷情よりの感謝の祈りを
捧ぐると共に、我敬愛する讀者諸君に對して、有らゆる機會
を捉へて一たび聖地巡禮の舉を企てられんことを勸告せずん
ばあらず。パレスチナを見ざれば以て充分にイスラエル民族
の偉大なる歴史を解すること能はず、又以て充分に主イエス
の人格を體得すること能はず。能はずと云ふは言稍や強きに
失すれども、余の實驗は余をして斯く言はざるを得ざらしむ。

少くとも此行の賜として、舊約聖書の趣味は曾て余の経験
 し得ざりし程度のものとなりぬ。而して福音書は今や余に取
 りては、全く新しき書となりぬ。一たび聖地に主の御足の跡
 を辿りし以來、主が地上の生涯は活躍して常に我が眼頭に在
 り、福音書中の主の一言一行は、今更の如く一種清新の意義
 を以て、我心の奥扉に迫り来るものあるを覺ゆ。

『夫れ道肉體と成りて我等の間に寄れり、我儕其の榮を見
 るに眞に父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充
 たり』

余は此聖句を引用してバレスチナ巡禮記の筆を擱く。(終り)

大正九年十二月十五日印刷
 大正九年十二月十六日發行

(バレスチナ印刷所附)
 【定價金壹圓】

不許複製

著 作 者 加 藤 直 士
 發 行 者 福 永 文 之 助
 印 刷 者 村 岡 平 吉
 印 刷 所 福音印刷合資會社
 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
 横濱市太田町五丁目八十七番地
 横濱市山下町百〇四番地

發行所

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
 警 醒 社 書 店
 振替口座東京 五五三
 電話 銀座 座 一五八七

◆加藤直士著譯書◆

トルス
イ
我 懺 悔 定價八十錢・送料六錢

トルス
イ
人 生 觀(品切) 定價九十錢・送料六錢

トルス
イ
基督教の眞髓(品切) 定價二十錢・送料二錢

オ
イ
現代宗教哲學
主要問題 定價二圓・送料八錢

コ
オ
サ
ド
宇宙の統一 定價一圓・送料八錢

コ
オ
サ
ド
東西思想の統一 定價一圓・送料八錢

◆加藤直士著譯書◆

羅 馬 書 註 解 定價一圓五十錢・送料八錢

エ
サ
バ
チ
最近贖罪論 定價八錢・送料二錢

基 督 教 提 要 定價八錢・送料二錢

キ
ン
グ
博士 イエスの倫理(品切) 定價一圓・送料八錢

英
和
對 照 ロバートソンの美訓(品切) 定價十錢・送料四錢

日
曜
校 學 中等科教案(第一年) 上卷定價三十錢
下卷定價三十錢
各送料四錢

德富健次郎著 順禮紀行

定價一圓二十錢
送料六錢

小西増太郎著 聖地パレスチナ

定價一圓五十錢
送料八錢

木村清松著 世界一週傳道旅行(品切)

定價五十錢
送料六十錢

別所梅之助著 霧の王國へ

定價一圓四十錢
送料六錢

別所梅之助著 聖書動物考

定價三圓三十錢
送料十二錢

別所梅之助著 聖書植物考

近刊

加藤一夫譯 美術上の基督

定價一圓五十錢
送料八錢

396
64

終

